【日本語訳】

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』を読んで

宋科淇
鞍山師範学院 外国語学院

誰もが分かれ道に立って、昨日の岩場を振りかえり、遠方の漠然として入り組んだ様子を眺めて迷子のようになる経験をします。人生は苦難に満ちた旅路で、道のりはあまりに苦しく、いかに選択し救済するかです。『ナミヤ雑貨店の奇蹟』で東野先生が解答を持ってきてくれるでしょう。

四年前のある怠惰な午後。セミの声と鐘の音を伴って、東野圭吾の文字が猛進する列車のように脳裏に突っ込んで来ました。童話のお面が引き裂かれたのはいつだったのか、成長すればするほど、世の中の残忍な真実さに気づけるようになります。東野圭吾は『ナミヤ雑貨店の奇蹟』の深くやさしい筆触を通して人の心に隠れた善良さを呼び覚ましました。

翔太、敦也、幸平のこの世界に対する怒りと反発に満ちた感情は、どれほどよく知っている感情でしょう。彼ら一人一人に自分のかつての姿が見えるのは、この三人が誤って岐路に入ってもなお、善を行おうとする心を持っている私たちそのものだからです。時には私たちが望んでいなくても闇に落ち、地獄の縁まで翼を伸ばすこの世の天使がいないだけです。

夢か余命わずかな彼氏に寄り添うかで困惑している月のウサギから、音楽を諦めて魚屋を継ごうか分からない魚屋ミュージシャン、父親のいない子供を生むかどうかとまどっているグリーンリバー、両親と夜逃げしようかというポール・レノンに至

るまで。すべて心を救うという理念が貫いています。事実の経験が教えくれるのは、救いはお互いさまということです。救う側であれ救われる側であれ、人類の感情の中で最もすばらしく最も煌びやかで美しい花が、東野作品で姿を現します。これはおそらく人類と動物の違いでしょう。

「長年悩みの相談を読んでいるうちにわかったことがある。多くの場合、相談者は答えを決めている。相談するのは、それが正しいってことを確認したいからだ。だから相談者の中には、回答を読んでから、もう一度手紙を寄越す者もいる。たぶん回答内容が、自分が思っていたものと違っているからだろう。」どの世代の人にも自分の困惑があって、このくだりが一番好きです。

考え中のもつれた事情が、実は心の中ではとっくに選んであって、誰かが認めてくれさえすれば、しっかりと実行できるのです。もしくは、たとえ他の人に認められなくも、自分が求める方向にことが発展することもあります。

面白いのは、自分の主観だけで相手がどういう人かを断定してはならないことです。ちょうど相談者がまだ事情を語り終えていないうちは一体どういう人なのか想像できないように。当事者の立場を推測するわけにもいかず、当事者が将来どうなっていくのか想像できないのはなおさらです。三人の青年が月のウサギに運動を諦めないよう忠告したとき、かえって彼女が信念を固めたように。そのときは予想できなかったことでした。また、グリーンリバーの娘がグリーンリバーの死を、母親が娘と心中しようとしたのかと推測していましたが、実のところ事実ははっきりと反対でした。これらの矛盾はある種の対立の美感を構成しており、引き裂かれながらも統一されています。

「今日までの道のりは決して平坦ではなかったけれど、生きているから感じられる痛みもあると思い、乗り越えてきました。」

選択は一人の人生を変えることができますが、誤った選択をしてしまったときはどうでしょうか。未来の暮らしの中で自分の本意を見つけさえすれば、厳冬が容赦ないときでも暖かいものが噴き出してきます。

空には雪片が翻り、きらきらと透明な六角形で、貴重な善意は冬の中でますます魅惑的です。春が到来する前に、私たちは互いに寄り添って、堅実な足並みで歩き、朝日の輝きを迎えるのです。心の中に愛があれば、大海に向かって、春うららかに花開きます。

グリーンリバーとポール・レノンから感じたのは、実のところ私たちは事物の最も分かりやすい一部分だけを発見しているということです。そもそも、この世界の最も深い愛情は言葉で表現する必要がありません。私は両親を思い出しました。

彼らはまるで一本の分離した線が、わずかなふれあいの後、双方の世界の中から平行して、いつまでも交差しないかのようです。私は敏感になり始めて、卑屈、脆弱で、カタツムリのかたい鎧のように、柔軟さを心の底で支えて、鋭く照準を人に合わせました。

私は一度反抗して、ビール瓶を空けました。ほろ酔い、たばこ、傷跡、騒がしく揺れ動くレンズ、窓の外の寮、真実の引き裂かれた広がり、純粋なはっきりとした咆哮。私を愛する人はおらず、自身さえも、あたたかなナミヤ雑貨店に出会うまでは。

かつては父を恨んでいました。彼のエゴ、軟弱さ、暴虐を恨んでいたのです。反目しあううち、濃厚な、かたい感情まで見落としており、たとえ恨みであっても、抽象的に空虚で味気ない感情になっていました。ポール・レノンが数年後、両親が命を懸けて彼を守ったことに気づいたというところで、私の目からもポールと同じように涙が湧き出し、紙全体を濡らしてしまいました。

はっと気づくと、父の影はもう雄大ではなく、少し背が曲がっていました。壮健だった両手はもう力強くなく、袖まくりした両腕は青筋だらけでした。頑固な白髪は生命があるかのように、私の偏った瞳に刺し入って、涙が出そうになりました。成長と許しが、一瞬の間にありました。

私は書物のほかにも次第にたくさんのものを理解できました。こわばった硬い殻を外すと、赤く腫れた肩先、細かい言い付け、熟睡してからそっと持ち上げた布団の角が、乱麻のように雑多な記憶のかけらの中から涌き起こってきました。同時に訪れたのが、力の限り抵抗した、またよく知っているけれどよく知らない血筋が私と父をしっかりとつないでいる感覚でした。

一人の文を読むことは、その感情の中からある種の力を抜き取ることです。

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』が好きな理由は、複雑に入り組んだ物語の中に、それぞれ自分の姿があるからです。奇怪な様相をした世界に踏み入り、東野圭吾につき従えば、最もすばらしく最もでたらめな時代に流失した、人と人の間にある単純な善意と真心を見つけられますよ。

川端康成：清醒但孤独的徒劳

吉义天宇
西南石油大学 石油与天然气学院
笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

零

1972 年，4 月 16 日，樱花盛开的时节。

川端康成独自一人来到玛丽娜公寓。

他在地上铺好一张被子，枕旁搁好威士忌和酒杯，然后细细品尝了这瓶美酒。

最后安静地躺在盥洗室，嘴里含着一支软管。

软管连接着外面的煤气罐。

一、“凌晨四点，海棠花未眠”

其实最初知晓川端康成死因为自杀时，我只觉着困惑。只因那时我对他的了解仍停留在《花未眠》中，仍觉得先生是那位在凌晨四点醒来，写下“如果说一朵花很美，那么我就要活下去”的温柔词客。

归根结底，《花未眠》为我描绘出的川端康成是一个疲惫但温柔、孤独但清醒地生活着的旅人，所以我未曾想过他会选择自杀。大概正是因为现实中川端康成最终放弃生命的选择与曾经在文中写下“那么我就要活下去”的强烈反差，让我开始有了想要进一步了解他的过去的想法。我才突然想起了凌晨四点失眠的痛苦，才

终于察觉到那一句“凌晨四点醒来，发现海棠花未眠”背后潜藏的失眠的孤独与无助，才最后注意到文章结尾时还隐藏着这样的焦虑与不安。

于是我才终于明白，原来《花未眠》带来的不只是那朵文学史上永盛的海棠，也是那位孤独但清醒的词客向我们不断展露的凌晨四点的悠长寂寞与缱绻思绪……

“完全是一种徒劳嘛”

前几天与学医的友人玩笑时才得知，煤气自杀其实是最美的一种自杀方式——因为体内由于缺氧而形成的碳氧血红蛋白会使面部和口唇呈现绝美的樱桃红色，好比特意修饰过的遗容——刻意，但也充满美感与仪式感。

把这分享给另一位正在拜读《雪国》的友人，她反问我：“如果这样，那从川端康成一贯秉持的‘徒劳’来看，这样唯美但刻意的自杀不才是他一直重复说的一种徒劳么？毕竟人都没了，这按照中国俗语说来就好比‘斯人已逝，生者如斯’，那这完全是没必要的嘛。”说着，她还模仿岛村来了一句“完全是一种徒劳嘛”。听完我直觉哪里不对，但一时也并不能列出三五条来直接反驳，于是下来开始仔细思索这个问题。

关于先生选择自杀这个问题，从旁观者的角度看来，这大约是他有意做下的选择。

就所谓“殡仪馆先生”的悲戚生活而言，这样就此逝去也许是并不令人意外的结果；从他作为文人特有的浪漫入手，选择这样充满仪式感的形式自我了结，而非听天由命地等待死亡的收割也并不难理解；且未找到遗书的现场大约是对他曾写下的“自杀而无遗书，是最好不过的了”的最好印证了。

那么难点落在选择煤气自杀这个方式，唯美与刻意并列。

唯美——川端康成的一生都是在追求美的——凌晨四点未眠的花，遥远雪国暮色之镜，唯美清灵的伊豆岛……对于追求了一生的美的他来说，所有美的东西却都离不开关于悲的味道，美如

樱花脆弱灿烂却短暂可悲，悲如空谷广阔寂寞却静谧幽美。所以为这最后的死亡的悲戚点缀上极致的美感，我觉得便不会是徒劳无功的，也不会被归于“徒劳”之列。

刻意——人们会觉得川端康成刻意营造的自尽与他主张的“徒劳”背道而驰，这样的情绪大约是源于他曾写到的那一句“生存本就是一种徒劳”。人们由此觉得他并不看重生命，觉得他这样隆重死去，就他按理应该“轻视”的生命而言，压根是徒劳、是多此一举。但事实上，结合川端康成在《临终的眼》中对于芥川龙之介与太宰治等人的自杀行为的评判，以及那一句“我觉得人对死比对生要更了解才能活下去”，我觉得，川端康成和其他的日本文人有着一脉相承的生死观——并不是看轻生命，而是看重且严肃对待死亡而已。而这正并不与所谓“生存本就是一种徒劳”相违背。

而这些仪式感的形式也许正是日本文人对于自《源氏物语》便盛行的“物哀”之美、“灭亡的美”生死观的最好践行——芥川龙之介枕着圣经服下了安眠药，有岛武郎和情人在轻井泽的别墅中殉情，太宰治殒命在了玉川上水，三岛由纪夫以最为传统的武士道手段剖了腹，川端康成则静静地含着煤气管离去，一个字也没留下……

所以归根结底，这一场唯美而刻意的仪式不该是一种徒劳，也不必有岛村之流来唾上一句“完全是一种徒劳嘛”之类的话。
只因为每一个时代，我们总能看到一些人以一种新奇的方式谢幕。
或是江湖侠客隐遁山林，或是文人墨客退居私宅。
但“生如樱花，灿烂而亡”，于川端康成而言，或许就是那个最适合的退场方式。

零

川端康成，1968 年诺贝尔文学奖获得者，却自尽于获奖后的第 4 个年头。

些许是他在颁奖礼上演说的词的印证，于是这颗清醒但孤独

的心停止在了 4 年后那个樱花盛放的早晨，没有留下一句话。

我这般后来人看着，便只觉着那个时代、那个清早，从四点的凌晨里迎面走出个清醒但孤独的灵魂，看着人间之景也不说些什么，只轻轻叹上一句“徒劳”，便趁樱花不注意，搭上雪国的列车离去了……

【日本語訳】

川端康成　冷静しかし孤独な徒労

吉義天宇
西南石油大学 石油与天然气学院

零

1972 年、4 月 16 日、桜が満開の時。

川端康成は独りで逗子マリーナ本館を訪れました。

床に布団を敷き、枕元にウイスキーとグラスを置いて、事細かにその美酒を味わいます。

最後に静かに洗面所で横たわり、ホースをくわえました。

ホースは外のガスボンベにつながっていました。

一、「夜なかの四時、海棠の花は眠っていなかった」

実のところ最初に川端康成の死因が自殺と知ったとき、私はただ困惑だけを覚えました。当時、彼に対する理解がまだ『花は眠らない』にとどまっていたので、先生は午前四時に目が覚めたとき「一輪の花が美しいならば、生きていよう」と綴る詩人だと思っていたのです。

つまり、『花は眠らない』で描かれた川端康成は、疲弊している、優しい、孤独ながら冷静に生きている旅人だったので、私は彼が自殺を選ぶと思ったことがありませんでした。

恐らく現実に川端康成が最後に生命を放棄する選択をしたこととかつて記した「ならば、生きていよう」の強烈なコントラストで、私は彼の過去の考え方をもっと知りたいと思うようになったのです。たった今ふと午前四時に眠れない苦痛を想起して、ついに「夜なかの四時に目がさめた。海棠の花は眠ってい

なかった」という文の陰に潜む眠れない孤独と無力さに気づき、最後に文章の終わりにもまだこのような焦慮と不安が隠れていることに気づきました。

そしてやっと分かったのは、そもそも『花は眠らない』がもたらしているのは文学史の上で永久に咲き誇る海棠だけでなく、孤独ながら冷静な詩人が見せた午前四時の長い寂しさと愛着して離れられない気分でもあったということです。

二、「完全に一種の徒労でしょ」

数日前に医学を学ぶ友人とふざけていたとき、ガス自殺が実は最も美しい自殺法の一つだと知りました。酸欠のため形成されるカルボキシヘモグロビンにより顔面と唇がとても美しい桜色を呈し、あたかも飾られたような死に顔になるのです。工夫を凝らして、しかし美感と儀式感にも満ちて。

この話を『雪国』を読んでいる最中の友人にしたところ、「もしそうだったら、川端康成の一貫して維持する『徒労』から考えて、そんな耽美で凝った自殺は彼がずっと繰り返し言ってきた一種の徒労ではないの？結局のところ人は亡くなるから、ちょうど中国のことわざに言う『斯の人は已に逝き、生者は斯くの如し』で、完全に必要ないでしょ」と問い返されました。彼女はさらに島村をまねて「完全に一種の徒労でしょ」と。

聞き終えて、どこかおかしいと直感しましたが、すぐ直接な反駁を手短に並べることもできないので、慎重にこの問題を思索し始めたのです。

先生が自殺を選択んだというこの問題に関して、傍観者の角度から見ると、彼のわざと行った選択です。

「葬式屋はん」と呼ばれていた悲しい生活にとって、このように逝くことも決して意外な結果ではありません。彼の文人に特有なロマンチックさから切り込むと、こうした儀式感に満ちた形式で自決することを選び、天命に任せて死の刈り取

りを待たなかったのも理解に難くありません。遺書の見つかっていない現場はおよそ彼がかつて述べた「自殺とすれば、遺書のないのがいい。無言の死は無限の言葉である」の最高の実証です。

そうなると難点は耽美と工夫の併存するこのガス自殺という方法を選んだことに落ち着きます。

耽美――川端康成の一生すべては美の追求――夜なかの四時に眠っていなかった花、遥か遠い雪国の夕やみの鏡、耽美で清雅な伊豆大島……一生の美を求めた彼にとって、すべての美しいものは悲しみの気分と切り離せないもので、美は桜のよう脆弱に光り輝いて短く哀れみを誘うもので、悲しみは幽谷の広大な寂しさのように静謐で美しいのです。だからこの最後の死の悲しみに極致の美感が飾りを添えているのであり、私は徒労ではあり得ず、「徒労」に含められることもあり得ないと思います。

工夫――人々は川端康成の工夫を凝らして行った自殺が彼の主張する「徒労」と背馳すると感じるでしょう。このような情緒はおおよそ彼がかつて書いた「生きていることも徒労であるという」から出ています。人々はここから彼が決して生命を重視していないと感じ、彼がこのように厳かに死んでしまったのは、彼が「軽視」していた生命にとって、初めから徒労であり、余計な世話だと感じているのです。しかし事実上、川端康成が『末期の眼』の中で芥川龍之介や太宰治の自殺という行為を批判していたことと、「人間は生よりもかえって死について知っているような気がするから、生きていられるのである」という言葉を結びつけて考えると、川端康成は他の日本の文人と同じ流れを汲む死生観を持っていたと思われるのです。別に生命を軽視してはおらず、死に対して重視し厳粛なのです。これは決して「生きていることも徒労であるという」と相反するもので

はありません。

こうした儀式感のある形式は、日本の文人が『源氏物語』から盛んな「もののあはれ」の美、「滅亡の美」死生観の最も良い実践なのかもしれません。芥川龍之介は聖書を枕に睡眠薬を服用し、有島武郎は恋人と軽井沢の別荘で心中、太宰治は玉川上水で命を落とし、三島由紀夫は最も伝統的な武士道の手段である割腹。川端康成は静かにガス管をくわえて逝き、一文字も残さず……

だから結局、この耽美で工夫を凝らした儀式は徒労とすべきではなく、島村のように「完全に一種の徒労でしょ」と吐き捨てる必要もないのです。

ただ時代ごとに目新しい方法でカーテンコールに応える人々が見えるからというだけです。

あるいは無頼漢が山林に隠遁し、あるいは文化人が私邸に退くような。

しかし「桜のように生き、きらきらと美しい時期に散る」のは、川端康成にとって最も適した退場の方法だったかもしれません。

零

川端康成は、1968 年のノーベル文学賞の受賞者ですが、受賞して 4 年目に自殺しました。

少しは授賞式での講演を実証したのか、この冷静で孤独な心臓は 4 年後の桜が咲き誇る朝に停止して、ひと言も残しませんでした。

私のような後継者から見て、その時代、その早朝、四時に夜明けの中から出て行った冷静にして孤独な魂は、世の中の景色を見ながら何も言わずに、そっと「徒労」とだけ嘆いて、桜が気づかないうちに、雪国の列車で立ち去ったような気がするだけです……

① 『花は眠らない』
② 『花は眠らない』の「花は眠らないと気づいたのも、宿屋にひとりいる私が、夜なかの四時に目をさましたからかもしれない」
③『葬式の名人』
④『自誇十講』
⑤『末期の眼』
⑥ノーベル賞受賞講演での「僕の今住んでいるのは氷のように透み渡った、病的な神経の世界である。

日本是朵烟花

王驿尘
北京化工大学 文法学院
笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

在很长一段时间里，我是不敢读日本作家的作品的。我对于“死”这件事是很害怕的，我们敬畏死亡，我们常常避之不谈。而日本不同，日本作家、日本人、乃至整个日本都对命运、生命和谋杀都有着独特的见解。他们的生死观是世界独一份的。

这种见解来自他们脚下的那片土地。日本是一个灾难多发的国家，地震、火山、海啸等，四面被海围住的感觉也许是我们很难感同身受的。环境是不能选择的，自然规律是难以逃脱的，多灾多难的日本人在不可超越的环境里一点点淬炼出独特的、异于其他文明的生死观。他们对死亡有一种诗意的淡化，有异于其他民族、其他文明的冷静与泰然。灾难总是无穷无尽地在身边萦绕，与其被动接受不如主动选择，主动迎接有尊严的死亡方式。所以我们能看到日本的军官和士兵在走投无路时会选择剖腹自尽，慷慨赴死，这是他们对死亡的迎接。

死是对生的不稳定状态的一种解脱，这种不稳定状态不单单指的是可能比明天更先一步到来的自然灾害，更指他们无奈或无法融入群体时的状态，日本人在表达上往往“吝于”“羞于”“短于”“弱于”，这不得不提到他们的“耻感文化”。他们害怕给别人带

来麻烦，于是更多地选择了“麻烦”自己，我曾听说过一个事例，是在日本新干线上的一位姑娘因为身体原因呕吐，不想打扰到车上其他乘客，便一直把呕吐物装在自己袖子内直到下车。或许也正是因为这种耻感文化，使得日本人“冲破”了死亡禁忌，如何迎接死亡成为一门新的学问。此前在日本曾流行过“终活”，以老年人为主的群体积极参与其中，他们学习如何迎接死亡，如何谢幕人生。日本还推出了“终活”旅游团：处理财产、撰写遗嘱、拍遗照、甚至躺入棺材内，亲身体验入棺的心境。越来越多的人关注死亡，渴望有尊严地死去，也由此催生了“临终关怀”和“安宁守护”，他们的理念是对生命的尊重与珍惜，让人生的最后阶段过得安宁、平静、有尊严，让每一个生命在临终时都能有尊严地离开，完成对人生的谢幕。直面衰老与死亡，是对死亡的敬畏。

这种对死亡的独特的领悟和解读，渗透在日本文化方方面面。日本的小说、影视作品等都传递出那种悲剧感、宿命感、使命感和民族风格鲜明的死亡美学。日本有太多著名的作品实则都是一种“死亡欢呼”，他们慢慢讲述死亡，他们细细描摹死亡，他们反复咀嚼死亡，对死亡却是无所谓的态度：“死并非生的对立面，而作为生的一部分永存。”“我希望他从小就明白生和死是同样的尊贵，死是每个人都不可逃避的。”他们不畏惧死亡，也从不避谈死亡。甚至在受众年龄较小的动画与动漫中，死亡都是“常客”，如《名侦探柯南》，日本的侦探小说不仅仅是推理与破案，更糅杂着一个个小人物在里面，他们描摹出了社会人生百态。

这种对死亡的独特的领悟和解读，渗透在日本街头角角落落。樱花是日本国土必不可少的元素，日本人像樱花，樱花也像日本人。他们投入时身心俱疲，认真起来一板一眼，乃至灿烂时的热情奔放，飘逝时的极致坦然，都是樱花开落模样——瞬间灿烂，刹那芳华。从绽放到飘散的推移，让人感受到美好事物的短暂和不可复得，更令我难忘的是在那瞬间，他们活得肆意、痛快、尽兴。

这种生死观有一种刹那感。

我看过日本的电视剧和动漫、里面有走起来“哒哒”响的木制房屋。与创造出坚不可摧的石结构城堡、寺院、都市的民族不同，在易朽的木结构房屋中居住的民族，有某种以断念、达观为美的意识。木头易朽，文明更迭。他们追求的从不是“永垂千古”，他们希冀的无非是那片刻的荣光，即便死亡，也在所不辞。

日本的烟火大会非常著名，他们本身又何尝不像烟花一样呢？烟花登顶那一刻绽开在夜空中却又很快消逝，他们知道一生短暂，他们知道死亡可能就在明天，他们选择了义无反顾，把人生活得恣意洒脱又痛快。

日本是朵烟花，我在隔岸看。

他们敬畏死亡，我敬畏他们。

所阅书目：《樱花残：灾难视角下的日本文化》

【日本語訳】

日本は花火」

王驛塵
北京化工大学 文法学院

かなり長い間、日本の作家の作品を読む気になれないでいました。私は「死」がとても恐ろしく、私たちは死を畏敬しており、いつも話すことを避けています。しかし日本は異なって、日本の作家、日本人、さらには日本全体が運命、生命、謀殺に対して独特な見解を持っています。彼らの死生観は世界にただ一つのものです。

このような見解は彼らの足もとの土地から来ています。日本は災難の多い国で、地震、火山、津波など、四方が海に囲まれた感じも気持ちを同じくしにくいものです。環境は選ぶことができず、自然の法則は逃れがたいので、多難な日本人は越えられない環境の中で、独特な他の文明と異なる死生観ほんの少しずつ焼き入れし、精練しました。彼らは死にある種の詩情を持たせ淡泊にしています。これは他の民族、他の文明の冷静さや落ち着きと異なるところがあります。災難がいつも尽きることなく身の回りにつきまとっているので、受動的に受け入れるより自発的に選ぶほうがよいと、尊厳ある死を自発的に迎える方法を持っています。だから日本の軍人が窮地に陥ったとき割腹自殺を選び、勇敢に義に殉じるのが見られるのです。これは彼らの死の迎えかたです。

死は生の不安定な状態に対する一種の解脱です。ここで言う不安定な状態とは、明日より先に到来する自然災害のみならず、彼らが無力または集団に溶け込めないときの状態をも指しています。日本人が表現の上でよく「出し惜しむ」、「恥じる」、「短い」、「弱い」

のは、どうしても彼らの「恥の文化」に言及する必要があります。彼らは他の人に面倒をかけることを恐れて、自分に面倒をかけます。聞いたことのある事例では、日本で新幹線に乗っていた女の子が体の原因のため嘔吐したとき、他の乗客に迷惑をかけまいと、下車するまで吐瀉物を自分の袖の中に入れていたそうです。もしかするとこうした恥の文化のせいで、日本人は死の禁忌を「突き破り」、どのように死を迎えるかがひとつの新しい学問になったのかもしれません。以前日本で流行した「終活」は、高齢者を主とする層が積極的に参与して、どのように死を迎え、どのように人生の幕を下ろすか学ぶというものです。日本では「終活」ツアーも組まれました。財産の処理、遺言状の作成、遺影の撮影、棺桶に横たわり棺に入る気持ちを自ら体験するものまであります。多くの人が死に関心を持ち、尊厳ある死を渇望するようになり、そこから「終末医療」と「ホスピスケア」が生まれました。彼らの理念は生命を尊重し大切にすることです。人生の最後の段階を安寧に、落ち着いて過ごし、尊厳を守って、すべての生命が臨終のとき尊厳を持って世を去り、人生の幕引きを完成させられるようにします。老いと死に向かい合うのは、死に対する畏敬です。

このような死に対する独特な悟りと解読は、日本の文化の各方面に浸透しています。日本の小説、映像作品などはすべてそうした悲劇感、宿命感、使命感、民族性の鮮明な死の美学を伝えています。日本には、実は一種の「死の歓呼」である有名な作品があまりにも多くあります。彼らはゆっくりと死を語り、細かく死を描写し、繰り返し死を咀嚼して、死についてはどうでもよいという態度です。「死は決して生の反対側ではなく、生の一部分として永久に存在する。」「私は彼が小さいときから生と死が同様に尊いことが分かるよう望んでいる。死は誰も逃れられないものだ。」彼らは死を恐れず、死について話すことも避けません。やや子供向けのアニメの中でさえ、死は「常連」で、

たとえば『名探偵コナン』など、日本の探偵小説は推理と事件の解決だけでなく、すべての小人物がごちゃまぜになっていて、彼らは社会の人生の百態を描写しています。

このような死に対する独特な悟りと解読は、日本の街角の至る所に浸透しています。桜は日本の国土になくてはならない要素です。日本人は桜のようで、桜も日本人のようです。彼らが入るときは心身ともに疲れおり、真剣できちんとしていて、さらには光り輝く時の情熱があふれ出ており、散り際は平然の極致で、すべては桜の花が咲いて散る姿。一瞬の輝き、刹那の芳しき華。ほころんでから散るまでの推移が、人に美しい物事の短さと戻らなさを感じさせ、さらに忘れがたいのはその瞬間、彼らが思う存分に生き、痛快で、思う存分に楽しんでいたことです。

このような死生観にはある種の刹那感があります。

日本のドラマやアニメで、歩くと「たったっ」と響く木造家屋を見たことがあります。非常に堅固な石造りの砦、寺院、都市を創造した民族と違い、朽ちやすい木造家屋に居住する民族は、断念、達観を美しいとするある種の意識を持っています。木は朽ちやすく、文明は交替します。彼らの追求するものは「永遠に残る」ことではなく、彼らの願いはきっとあの片時の栄光です。たとえ死んでも、絶対に断らないでしょう。

日本の花火大会はとても有名ですが、彼ら自身も花火と同じではないでしょうか。花火は頂上に昇ったとき夜空の中でほころびて急に消えます。彼らは一生が短いこと、死が明日かもしれないことを知っていて、振り返らないことを選び、ほしいままに痛快に生活するのです。

日本は花火、私は岸を隔てて見ます。

彼らは死を畏敬し、私は彼らを畏敬します。

読んだ本：『桜花残：災難視角下的日本文化』

家：一条无法逾越的鸿沟
—论《人间失格》的现世思考

王燕
大连外国语大学　日本语学院
笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

《人间失格》是一部半自传体小说，大部分故事情节与作者太宰治有迹可循的人生轨迹相吻合。大庭叶藏是太宰治的化身，他借主人公之名诉说内心苦闷与无奈、不安与彷徨，细致地描绘了一个被社会“边缘化”人物的内心独白。回首太宰治的过往，一生自杀四次未果，对于其自杀的原因相信是诸多不幸共同导致的结果，但无论是大庭叶藏还是太宰治，家庭因素绝对是引领他们走向毁灭的一个重大原因。

家都是我们的母体，终其一生都会受到原生家庭的影响。

原生家庭的“阶级”之痛

每个人都带有原生家庭的心理烙印开始自己的成长经历。长大之后，那些摆脱不了原生家庭影响的人始终找不到与自己、同社会和解的方式。

大庭叶藏出生在大地主家庭，父亲从政且是大资本家，家里的吃穿用度都十分讲究。但是从小衣食无忧的生活并没有给他丝毫的幸福感。旧时代的大地主家庭承袭的是家父长制，排行靠后的他就像一个多余人，游走在亲人与佣人之间。

“我还是搞不懂，越想越迷糊，这令我感到惶惑不安，仿佛这儿世界上只有我一个异类。”古板的父亲、严肃的家庭氛围、家人的疏离使他更加胆怯、无助。在家这所牢笼里，他无法展现最真实的自我，隐藏自己、伪装自己或许是他唯一可以生存下去方式。

我们生下来就是一张白纸，对于世界的认识方式来源于父母和兄弟姐妹。在这样阶级严明的旧式大家族里，父母没有教他认识世界的方式，他需要自己去探索，当发现人类的虚假与伪善时他大吃一惊，无处诉说，默默承受。他不自信，因为这种极大的不自信导致他不知道如何与人相处，害怕与外界接触，缺乏与人有效沟通的技巧和自我认同，难以融入残酷的现实环境，内心敏感脆弱。逗笑别人，是他唯一与外界接触的方式，但日积月累使他身心俱疲。“当我在笑的时候，只有我自己知道我在哭。”

（二）原生家庭的缺爱之痛

大庭叶藏的父亲是鼎鼎有名的政治家，基本上都在东京工作，所以他经常见不到父母，与他们也没有太多的交流。在这个旧式封建大家庭里，从小到大从未感受过父母的关怀，母爱和亲情丧失在童年的记忆之中，导致缺爱。

因为在原生家庭缺爱，所以害怕拒绝。

“我的不幸，恰恰在于拒绝的能力。因为我害怕一旦拒绝别人，便会在彼此心里留下永远无法愈合的伤痕。”

为人父母要知道拥有高学识只是人生的一部分，生而为人，最主要的是学习如何与世界共处，即便生活上有诸多不顺，那也是成为人的必经之路。而在家庭中，将孩子培养成一个拥有健全性格的人是父母的责任。究其根本，父母的爱和教育才是促使孩子健康成长的制胜法宝。

（三）新生家庭的失信之痛

新生家庭迎来了新的希望，大庭叶藏与良子结婚了。后来，他亲眼目睹了良子与男子偷情，自此以后，他丧失了对人的信心。在替良子喝下安眠药三天后，第一句话是：“回家”。可是他的家在哪，无迹可寻。酗酒、消瘦、吐血、药物上瘾使他的身体每况愈下。良子等人将他送进了精神医院，三年后，他被大哥安置在破旧茅屋里，年近 60 的丑陋女佣阿铁负责照顾他，然而他却遭到女佣多次性侵。

“瞬间不足以成为生命的喜悦，我只相信死亡那一瞬间的纯

粹”或许唯有离世才是真正的解脱。

在人生的最后阶段，他将最真实的自己展现给世人，将自己不完整但全面的心路历程露骨地表现出来，这没什么好惭愧掩饰的，这的确就是他。他是一个多面派，一面对生活充满向往，“一切都会过去”,相信暴风雨过后一定会有彩虹。他看透了人的虚伪、冷漠、自私、伪善，或许释怀，“斜阳西下，已无法挽留，但第二天的太阳仍然会照样升起,给世界带来光明。”一面将生活的冷酷、炎凉世态写到极致，即使生命尽头，也要小心翼翼向世人呐喊:“生而为人，我很抱歉。回首此生，尽是可耻之事。”

结语

有些人用一生治愈童年，有些人用童年治愈一生。每个人都有不同的故事和际遇，随着自己成长的家庭，也有不同的回忆。无论是爱还是伤痛，“家”都是我们最初出发的地方，是我们一生中关系最密切的地方。所以，家是孩子性格养成的根源之所。而父母要懂得教育孩子远比赋予他生命意义重大，责任深远。

国之大计、教育为本。

天下父母，既然你们选择生下爱的结晶，请好好善待他们，好好教育、引导他们，毕竟你们是他的第一任老师，是在这个陌生星球上第一眼见到的亲人，在他们懵懂之际需要你们的呵护和培养。因为你们的关爱，世界可能会少一些孤儿、少年犯、抑郁症患者、性格缺陷等的少年儿童。

育儿是一门既修炼又考验的技术活、更是一门学问。对此我们要端正自己的育儿观，丰衣足食远比不上陪伴和精神上的安慰，将孩子捆绑在自己身边，让他们背负养育之恩的债务，莫不如放手让其远游。孩子是通过父母来到世界上的，但不是为了父母来到世界上的，他们是一个独立的个体，有自己的本能意识。人生怎么过他们自己说了算，他们有权选择过自己人生。

教会孩子做生活的实践者并不是旁观者，热爱并享受生活，不要让他们也发出“生而为人，我很抱歉”的呐喊。

【日本語訳】

家という越えられないギャップ
―『人間失格』の現世思考論

王燕
大連外国語大学 日本語学院

秋が来ても、真夏の暑さがまだ消えていませんが、朝晩の温度差は明らかに大きくなっています。昨晩は夜通しだるくて熱があり、寝付けず何度も寝返りを打って、万物を壊す足並みが進んだのだと知りました。一日の休みを申請して、一人で病院に行き、診療を申し込んで、並び、診察を受け、薬を受け取り、水と薬を飲んで眠り、起きてもまだ一人でした。ルームメイトは帰ってしまい、両親は遠くにおり、友達は自分のことで忙しいので、実のところ私は小さな事で誰の邪魔もしたくなかったのです。この過程は、作中のおばあさん荻野吟子が静かに片隅で縮こまって療養する様子にそっくりでした。

18 ～ 34 度、空気品質指数 24、今日は本当に良い天気です。窓の外の日光が机の上にこぼれ落ち、そこから床へとゆっくり動いて、時間はこうしたすっからかんな状態の下で流れていきます。あっさりした夕飯の後、以前の精神と力がかなり回復しました。早くにコンクールの公告を見ており、気持ちがはやるのに何から言おうか分からないこの感覚は、作中の知寿が笹塚駅で初めて藤田に会ったとき急に心が動いて周章狼狽する姿のようでした。今日の良い天気と作中の良い天気がぶつかって胸にあふれ、ぴったり合う雰囲気は渾然として天の成せるもの。何か書き始めるのにちょうどです。

簡単にして複雑、美しくて憂鬱、完全純潔にしてダークな魅力を持つ、その名は日本。本当のことをありのまま言うと、私の触れた日本の文化は決して多くありませんが、そこから全容を見通すと、見たことがある日本の文学、映像作品の中から、ほぼすべての年齢層の人が精神を帰依する対象を見つけられるように感じます。10 歳ぐらいの子供は宮崎駿の童話の世界の中ではしゃぎ、15 ～ 16 歳の少年は新海誠の幻想的な世界の中で感傷にひたり、20 歳ぐらいの青年は村上春樹の『ノルウェイの森』の変転浮沈を味わい、30 ～ 40 歳の中年は川端康成の『雪国』で秘境に迷い込み、同様の事例には事欠きません。どの年齢層かを問わず、もののあはれの美学における孤独と成長が、これらの文学、映像作品の一致する構想のようです。作者の青山七恵がこの作品を創作したのはちょうど 20 歳あまり、この作品の主人公も私もちょうど 20 歳あまりで、三つの生命の中で最もすばらしい年齢のめぐり会いは、偶然の合致と言うよりむしろ縁なのです。さらに巧みなところは、作中で 70 歳あまりの荻野吟子が 20 歳あまりの三田知寿と同じ屋根の下に配され、若い時期と老境の調和がとれていて、時には鮮明な対比を見せていることです。

この小さく清新な作品は主人公、三田知寿の視点で展開されており、ミレニアム以降の日本の若い世代の割と普遍的な生態がちらりと見えます。その生態の主題は孤独と虚無。生命の孤独はすでにマルケスが書き尽くしたとずっと思っていましたが、青山七恵は細かいところに孤独を用いて、読者の脆弱で敏感な神経にそっと触れてきます。吟子が病気にかかった後、独りで治るまでの四日間安静に横たわっている描写で、粘り強さのほうが多く伝わってきました。知寿はこっそりと他人の小物を盗んで収集する癖がありますが、そこからは孤独のほうが感じられます。吟子は老年の舞踏会に参加する前に必ず身なりを

きれいに整えており、体面が見いだせます。知寿は吟子の前で気付かないふりをして自分のすべすべな皮膚と精致な化粧を誇示することを好んでおり、そこからは虚無のほうが見られます。吟子は食事の都度、繰り返し芳介先生へのたそがれの慕情を処理していますが、そこには尊重のほうが見られます。知寿は陽平との半端な恋愛関係を終えた後すぐにまた新しい男友達の藤田と果てまで歩いていますが、そこからは孤独のほうが感じられます。吟子は子供がおらず友達も少ない一人暮らしの老人ですが生活は生き生きとしており、みずみずしさが感じられます。知寿と母親は感情が薄く、深く学ぶことをよしとせずアルバイトを選びますが、そこからは虚無のほうが見られます。

たまたまニュースにありましたが、今の日本では、高齢化、若い人の低い結婚率、社会の少子化などの問題が日に日に深刻だそうです。オタク文化が盛んで、多くの若い人が架空の世界中で孤独を紛らわすことを望んでおり、短い肉体的な喜びの中で虚無を埋めて、現実的な世界の中で友達と付き合おうと思わず、特に安定した親密な関係を築こうとしなくなってきているとのこと。反対に中国を見ると、この種の孤独感と虚無感は若い層にも拡散しています。これは隣国の日本から伝染したというより、工業化、情報化と経済がある程度まで発展した後の社会は内部から似かよった苦境を引き起こすのでしょう。思うに、若い人の孤独と虚無を生む直接の原因は耐えられない生活の重さです。たとえば固定化された社会階層、圧縮された昇進の余地、重い仕事のストレスなど。根本的な原因は実は耐えられない生命の軽さで、健康で美しく若い身体、思う存分金銭を浪費する旺盛な精力なら、当然として外へと関心が向きます。「深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ」。若い私も過去をなくし、目先に酔いしれて、未来を考えない生命の軽さに陥ることがあります。

ちょっとした病気になって元気を回復させるまでの隙間で、私は自分がこうした生命の軽さを打ち破り始めたと感じています。胃腸が落ち着き喜んでもち米のおかゆを受け入れられるようになったとき、食べ物のありがたさを感じました。皮膚がひりひりしなくなって綿布団にぴったり触れるようになったとき、糸一本一本の貴重さを感じました。呼吸が短くならず平均的に良質な空気を呼吸できるようになったとき、挙動の調和を感じました。喉の腫れが引いて鼻歌を歌えるようになったとき、歌のすばらしさを感じました。このような転換の中で、作中の孤独と虚無が浄化され進化しました。一人で食事して、寝て、本を読んで、考えて、学んで、運動するのは、実は孤独の中での成長、虚無の中での進歩です。より優れた自分になり、同じく優れた貴方と、よりより優れた生活の中で出会うためだけに。

青春の困惑する時期は重い風邪を経験するようなもので、結局やはり自身の免疫力に頼って一切に打ち勝つのです。療養の過程こそ本当のひとり日和でした。

异类

张兰
中国科学技术大学　科学岛分院
笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

何不抬头仰望那无垠苍穹
我们不过是漂浮其中的一粟
岂知这地球为何自转
自转、公转、反转，一切都随他而去吧
到处都感受到至高无上的力量，
所有国家，一切民族，
都能发现相同的人性。
唯独我是异类？

以上是节选太宰治在《人间失格》中引入的《鲁拜集》的诗句，读完有一种虚无颓废之感，让我能清楚感受到书中的主人公大庭叶藏在这个充满理所当然的“指导原则”的世间作为异类活着的恐惧和痛苦。叶藏是个从小体弱多病，敏感多疑的人，因为无法理解人类行为而终日惶恐不安，为了保护自己，他发挥“丑角精神”来逗乐他人以对人类最后的求爱，从开始的得心应手到被毫不起眼的同学竹一识破而感到精神崩裂，从和咖啡酒女殉情未遂开始，叶藏似乎就已被世间抛弃，而当他遇到了天真浪漫的妻子而终于

开始准备好好生活时，最后却连拥有纯洁无暇信赖之心的妻子也被人玷污而失去了对人类的期待，一步步失去了当人的资格。

很多人初读《人间失格》时，了解到的只有一个阴郁的，畏惧人类的“异类”在不抵抗和讨好中一步步堕入黑暗的故事，实际上无论是在太宰治所在的旧道德和旧秩序被破坏，人们丧失信念的战后日本社会，还是如今这个人潮汹涌、物欲横流的后工业时代，无数个想保留自我的“叶藏”都注定了被庞大的社会价值所裹挟的命运。我们两手空空诞生于世，可能连命运都是被迫选择，我们依赖别人而生，也要依赖别人而死。我们知道人们相互欺瞒，却又能过着圣洁、开朗的生活。我们因为害怕被人群排斥抛弃，害怕无人依靠的孤独，所以主动去承认由社会的胜利者构建的普世价值,以此来融入人群,变成作为一个人“该有的”模样。正如弗洛姆在《逃避自由》所说：“现代人误以为自己知道自己想要什么，而实际上，他想要的是别人期待他要的东西”，大多数人因为主动融入而看不到自己真正的内心，只有极少数人，即所谓的异类，像太宰治笔下的叶藏一样，即使对人类恐惧困惑，时刻感受他人即地狱，也能保持自己的本心，以不抵抗的姿态游走在这个得不到认同和理解的世间，虽然这样的异类从一开始便以注定会对这个世间绝望而“人间失格”。

太宰治的人生，似乎就是叶藏的真实写照，也离不开着“女人”、“死亡”、和“自杀”这样的字眼，也许是觉得自己生的罪恶，对现实的无力抵抗让他最终选择了自我毁灭。对物哀及其中蕴藏的瞬间美有着特殊感情的日本人，认为殉死的意义在于追求生命瞬间的最极致的美，就像那临风舞落的樱花，在日本人看来，就有一种因为由极盛转为衰落的感叹而产生的美，这种美，由于稍纵即逝而流淌着淡淡的哀伤，又由于死时的绚烂而有着向死而生的勇气。似乎日本的很多经典文学作品有意无意都藏有一种阴柔、质朴的美，也许和日本人信奉的物哀美学有着千丝万缕的关系。

《人间失格》与其说像是太宰治的一部私小说，不如说是太宰

治将自己的异类的想法赤裸裸的展现在读者面前，给予世人以警醒，给予自己以安慰。“一切都将就此流逝”，所以文章最后叶藏称不上幸福，也算不上不幸，也许这是叶藏身为“异类”最好的结局，卢梭在《论人类不平等的起源和基础》中曾说：“所有人都朝着镣铐的方向奔跑着，满心以为这样便可以获得自由”，撑起这个世界运转的往往是人类的欲望，而这些欲望往往是被大多数人承认并指定的“合法”的海洋，我们每个人身在其中，却没有足够的勇气像叶藏那样保持自己的本心，我们似乎都甘愿沉沦，而太宰治笔下的叶藏，就像一盏孤独的灯在这默许的黑暗中发出如同萤火一样孱弱的光，即使历经多年，依旧熠熠生辉。

所谓经典就是即使跨越时间和国度也能给予世人以光芒。相比于叶藏，我们似乎都是学会了如何在这处处充满规则的世间努力活下去的平凡人，但似乎这样也没什么不好，我们过着平淡的日子，追求简单的幸福，就像动物园里的动物，心里可能向往广阔的自然，而脚下的土地、百步之外的牢笼却一步步提醒着要活在当下，也许所谓“生活圈”就藏着这个意思，圈起来的不仅是生活和阶级，也有思想和信念，唯有没有“异类”想法的活着，我们才能融入周遭的生活，才能接住命运赋予的“恩赐”。

【日本語訳】

異端者

張兰
中国科学技術大学 科学島分院

どうだ　此涯もない大空を御覧よ
此中にポッチリ浮んだ点じゃい
此地球が何んで自転するのか分るもんか
自転　公転　反転も勝手ですわい
至る処に　至高の力を感じ
あらゆる国にあらゆる民族に
同一の人間性を発見する
我は異端者なりとかや

以上は太宰治が『人間失格』中に引用したルバイヤートの詩句の一部です。読み終えるとある種の虚無、退廃的な感じがして、主人公の大庭葉蔵が当然の「指導原理」に満ちた世の中を異端者として生きる恐れと苦痛がはっきりと感じ取れました。葉蔵は小さいときから体が弱く病気がちな、敏感で疑い深い人でした。人の行為を理解できないためひねもすびくびくと落ち着かず、自分を守るため、彼は「道化の精神」を発揮して他人を笑わせることで、人類に対する最後の求愛をしていました。初めは思いどおりになっていましたが、ぱっとしない学友の竹一に見抜かれ精神が炸裂するように感じます。カフエの女給と心中未遂してから、葉蔵はすでに世の中から捨てられたようになり、無邪気で天真爛漫な妻と出会ってついにまともな生活す

る用意を始めたとき、最後に清らかな信頼の心を持つ妻を人にけがされて人類に対する期待を失い、一歩ずつまともになる資格を失っていきました。

多くの人が初めて『人間失格』を読んだとき、ひとりの憂鬱な、人間を恐れる「異端者」が抵抗や道化の中で闇に堕ちていく物語と理解します。実際には太宰治のいた古い道徳と古い秩序が破壊され、人々が信念を喪失していた戦後の日本社会であれ、人の波が激しく沸き立ち、物欲が強い今のポスト工業化時代であれ、自分を保留した無数の「葉蔵」が巨大な社会の価値に巻き込まれる運命です。私たちは空っぽな両手で誕生し、恐らく運命さえ選択を迫られ、他の人に依存して生き、他の人に依存して死にます。人々は騙し合っているのに、神聖、純潔、朗らかな生活ができることを私たちは知っています。私たちは人の群れに排斥されて捨てられることを恐れ、誰も頼れない孤独を恐れて、自ら社会の勝者が作り上げた普遍的な価値を承認して、そうして人の群れに溶け込み、一人の「あるべき」姿になります。まさにフロムが『自由からの逃走』で「近代人は自分の欲することを知っているというまぼろしのもとに生きているが、実際には欲すると予想されるものを欲しているにすぎない」と述べているとおりです。大多数の人は自発的に溶け込むため自分の本当の内心が見えません。ごく少数の、つまりいわゆる異端者だけが、太宰治の描く葉蔵のように、たとえ人類に対して恐れと困惑があっても、いつも他人すなわち地獄と感じても、自分の本意を維持して、抵抗しない態度でこの認められず理解が得られない世の中を泳ぐことができます。このような異端者は端からこの世の中に対して絶望し「人間失格」となる運命なのですが。

太宰治の人生は、葉蔵の如実な描写のように、やはり「女」、「死」、「自殺」といった字句と切り離せません。自分の生まれ

た罪悪を感じ、現実に対する無力な抵抗により、彼は最後に自ら壊滅することを選んだのかもしれません。もののあはれとその中に埋もれた一瞬の美に特殊な感情を持つ日本人は、殉死する意味は生命の瞬間の最も極致の美を求めることにあると考えます。風に吹かれて舞い落ちる桜のように、日本人からすると、最盛期から没落に転じる感嘆から生まれる美があります。こうした美は、瞬時に消え失せてしまうため淡く微かな哀悼に流れ、また死の絢爛さのため死に向かって生きる勇気を持っています。日本の多くのすばらしい文学作品には、なんとなしにある種のしとやかで質朴な美が隠れているようですが、もしかしたら日本人の信奉するもののあはれの美学と複雑で入り組んだ関係を持っているのかもしれません。

『人間失格』は太宰治の私小説のようなものと言うより、太宰治が自分の異端者の考えを赤裸々に読者に見せて、世間の人に警戒心の高まりを与えて、自分に慰めを与えているものです。「ただ、一さいは過ぎて行きます」。ゆえに、文章の最後で葉蔵は幸せだとも不幸とも言えませんが、それは「異端者」としての葉蔵には最も良い結末かもしれません。ルソーは『人間不平等起源論』の中で、「すべての人が、自分の自由を確実にするのだと思いながら、自分たちを縛りつける鉄鎖へと走り寄っていった」と述べています。この世界の運行を支えるのは得てして人類の欲求で、これらの欲求は得てして大多数の人が承認して指定する「合法」な海であり、誰もがその中にいますが、葉蔵のように自分の本意を維持する十分な勇気がない私たちは、自ら進んではまり込んでしまいます。しかし太宰治の描く葉蔵は、ひとつの孤独な明かりがこの黙認という暗黒の中蛍の火のような痩せて弱い光を放つように、長年を経ても、依然として輝いているのです。

いわゆる名作とは、たとえ国と時間をまたいでも世の人に光

芒を与えることができるものです。葉蔵と比較して、私たちは規則だらけの世の中をどのように努力して生きていくかマスターした平凡人のようですが、それも悪くないようです。私たちが平板な日を過ごし、平凡な幸福を求めるのは、動物園の中の動物のようで、心の中で広大な自然にあこがれることはあっても、足もとの土地、百歩外の檻が一歩ごとにそこで生きていることを気づかせます。いわゆる「生活圏」にはこの意味が隠れているのかもしれません。閉じ込められているのは生活と階級だけではなく、思想や信念もです。ただ「異端者」の考えなく生きることでしか、周囲の生活に溶け込み、運命の与える「恵み」をしっかり受け取ることができないのです。

フロム『自由からの逃走』より
太宰治『人間失格』より
ルソー『人間不平等起源論』より
読んだ書籍は太宰治の『人間失格』

“借来”文化的重塑与新生

陈楚婷
中南大学　交通运输工程学院物流
笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

中国与日本虽不在同一块大陆，但却是一衣带水的近邻。中日两国在这两千年中，如同高大繁茂的榕树与如瀑布般覆盖在其上的根须，交织着，共同生长着；共生时分享，根须落地后又争夺。存于同一片土壤，互相影响着，没有人能将他们完好地彻底分开。

——引子

纵观中日文化交流史，中国往往是“占上风”的一方，因此中国人向来普遍认为，日本学走了很多我们的文化，比如汉字语音、文学艺术、技术工艺。曾经我也像大多数中国人一样，在面对日本文化时，往往将所有的重点放在其与我们的相似之处，而忽略了他们的特别之处。

直到我在一部纪录片中看到一个日本书法家对中日书法的理解。他认为，日本的书道虽然传承自中国的书法，但它的本质已经与中国的书法大相径庭了。中国的书法重视传统，讲究“打好基础，再筑高楼”；而日本的书道更多的是通过纸墨笔砚展现不拘一格的艺术形式，从一开始便鼓励创造性的个性展示，体现个人的精神境界与内涵。

我才突然意识到，那些被日本“借走”的文化与我们的传统文化早已经“貌合神离”。相同的石子投入两条不同的河流，随着时间的流逝，或急或缓，似清似浊的流水必然会打磨出两颗散发不同光泽的石子。日本向中国学习的文化，在勤劳的日本人民细心的培育下，生根发芽，开出了只属于日本的、绝无仅有的绚烂。甚至有些早已从中国的大地上消失的花朵，仍在这个小小的海岛上静静地开着，展现着让人无法忽视的强大生命力。

方圆之间

印章是中国传统文化之一，它集篆刻、雕刻，以及书法艺术为一身，往往被视为身份或者权力的象征。印章文化都曾在中日韩三国得到长时间的流传，印章成为官场批文、货币流通的必备身份证明，文人雅士也几乎人手一枚精致的私章。而如今的中国除了单位的公章和书画章，在日常生活中已经很难看到曾经精致，做工极为讲究的私章了，大多都被签名所代替。三国中唯有日本将印章作为日常必需品沿用至今，成为了每个人生活中必不可少的一部分。

日本人的一生中至少需要两枚印章，用于各种大大小小的场合。人们通常会找到制作印章的匠人专门定制，作为要伴随一生的物件，意义非凡。小小的圆形印章既是中日千年交流的见证，也是老匠人们几十年如一日心血的凝聚，更是印章文化在日本被赋予的全新意义与经久不变的传承。

如胶似漆

漆器，是两国在长达千年的文化交流中一个有力的见证者。两国的交流也如这胶与漆的黏合般，紧密相连，你来我往。漆工艺最初在中国诞生，对周边的国家产生了极大的影响；唐宋时期中国创造了许多高超的制漆技法，如“素髹”。直至这时，中国依旧是日本的“老师傅”。

然而到了元朝，情况便出现了反转。此前日本的漆器水平大幅上升，出现其民族特色的专有漆艺，并在传承中国漆艺的基础

上，开发出独特的“莳绘”漆艺。同时中国的漆艺发展逐渐单一化，中国漆工首次受命前往日本学习“倭漆”工艺。随后日本莳绘漆器成熟，“倭制”工艺反向影响中国漆器。日本漆艺整体水平超过中国，随着大航海时代的结束，日本漆器终于在欧洲一举成名，从此“japan”便成了漆器的代名词。这些年中日两国的漆匠们来往密切，共同致力于保护与传承这两国共有的珍贵文化。

截金独留

截金工艺是我国古代工匠首创的贵金属装饰工艺，最早起源于南北朝时期，用来装饰佛像和绘画。在唐代时，截金技术已经基本成熟，并且随着佛教传入日本，对日本的佛教艺术产生了极大的影响。经过后来的考古发现，宋代以后的佛像壁画中截金的痕迹渐渐消失，这门精妙绝伦的优美艺术在它的发源地上逐渐销声匿迹。与此同时，截金在日本一代一代艺术家们的努力下融合创新，逐渐发展出具有强烈民族特色的艺术作品，并将截金技术流传至今，被人们称为“终极的金工艺”。

如今世界上只有日本对截金工艺保持了不间断的活态传承。这与日本对非物质文化遗产的保护重视有关，上世纪 70 年代，截金工艺被认定为“重要无形文化”加以支持与保护，并且将三位杰出的截金师认定为“人间国宝”。此外还有每位截金师不断对截金的纹样、运用进行创新，为截金工艺创造了无限的可能与明天。

共筑匠心

在《京都手艺人》这本书中，我看到京都的匠人们怀着坚定的信念，呕心沥血地默默坚守，以自己之手承接源流，才让这些传统文化在此驻留。这样的“工匠精神”令人敬佩。中国是名副其实的文化大国，民间也不乏这样的能工巧匠，他们同样一生只做一件事，将中国优秀的传统文化源源不断的传承下去。

然而因为工业制造的发展、市场的萎缩以及后继无人的窘况，无论是中国还是日本的传统手工艺都难免有衰退的趋势，甚至面临着灭绝的风险。我认为中日两国应该保持密切的友好交流，在

传统文化的传承创新或者修复保护上，相互借鉴，相互学习。这些文化艺术不仅是两国的瑰宝，更是全人类的宝贵精神财富。中日应该携起手来，让两国的传统文化在人类文明的长河中成为无数永不磨灭的小石子，流光溢彩，群星璀璨。希望通过文化的桥梁，能促进中日经济等多方面的合作，努力构建契合新时代要求的中日友好关系！

后注：

阅读图书：

京都手艺人 . [日] 樱花编辑事务所编著 , 刘昊星译

参考文献：

汤大友 , 刘馨 . 中日两国古代漆器文化交流的探讨 [A]. 中国涂料工业协会，北京

李文茜 . 截金装饰技法及其应用价值研究 [D]. 湖北工业大学 .2020

【日本語訳】

「借りてきた」文化の作り直しと新生

陳楚婷
中南大学 交通運輸工程学院物流工程学部

中国と日本はひとつの大陸にはありませんが、一衣帯水の近隣です。中日両国はこの二千年の中で、大きく生い茂ったガジュマルの木と滝のようにその根を覆い、織りなして、共に生長しています。共生時には分かち合い、ひげ根が地面につくと今度は争奪。同一の土壌で相互に影響し合っており、彼らを完全に徹底的に分けられる人はいません。

——前置き

中日の文化交流史を見渡すと、中国は得てして「優位に立つ」方なので、多くの中国人はずっと、日本は多くの我々の文化を学んでいったと考えています。たとえば漢字の音、文学芸術、技術。私も以前は大多数の中国人のように、日本の文化に直面すると、あらゆる重点を中国との類似点に置いてしまい、日本の特別なところを見落としがちでした。

ある記録映画の中で日本の書家の中日の書道に対する理解を見るまでは。彼は、日本の書道は中国の書道から伝承するが、その本質はすでに中国の書道とたいへんな隔たりがあると思っているそうです。中国の書道は伝統重視、「基礎ができてから高楼を築く」ことを重んじます。いっぽう日本の書道では紙、筆、硯を通じた形式に拘らない芸術の形式が多く現れており、最初から創造性ある個性的な展示を奨励して、個人の精神の境界と

内包を体現しています。

そこで私はふと、日本の「借りていった」文化と我々の伝統文化はとっくに「表面は親しそうだが腹の中は違う」のではと気づきました。同じ小石を別々の河川に投げ入れると、時間の経過に従って、時に早く時にゆっくりと、澄んでいるような濁っているような水の流れで磨き上げられた小石は異なる光沢を放つでしょう。日本が中国から学んだ文化は、まめな日本国民が注意深く育成するもとで、根を下ろし芽吹いて、日本にしかない、またとない絢爛さを花咲かせたのです。とっくに中国の大地から消えてしまったいくつかの花が、今なおこの小さい島の上で静かに開いていて、軽視できない強大な生命力を見せていることさえあります。

方形と円形の間

印章は中国の伝統文化のひとつで、篆刻、雕刻、書法の芸術を一身に集め、よく身分あるいは権力のシンボルと見なされています。印章文化は中日韓の三国で長い間、広く伝わり、印章は官界の返答文書、貨幣の流通のなくてはならない身分証明になって、文人もほとんどが精致な個人印を手にしていました。しかし今の中国では組織印と書画要のものを除いて、日常生活では精致で凝った作りの個人印を見ることはすでにほとんどなく、大部分がすべて署名に取って代わられています。三国の中で日本だけが印章を日常の必需品として今なおそのまま用いており、すべての人の生活の中でなくてはならない一部分になっています。

日本人の一生の中で少なくとも二つの印章が必要で、さまざまな場で用いられます。通常は印鑑制作の職人に注文して作らせ、一生を共にするものとしており、その意味は並外れています。小さい円形の印章は中日の千年の交流の証人であり、古い職人らが何十年も変わらず心血を凝集させたものでもあり、さ

らには印章文化が日本で与えられた全く新しい意味と長く変わらない伝承でもあります。

漆の如く膠の如く

漆器は、両国の千年続く文化交流における有力な証人です。両国の交流もこの漆と膠のようにぴったりと、しっかり相連なって互いに往来しています。漆の技術は最初に中国で誕生し、周辺の国に極めて大きい影響を生じました。唐から宋にかけての中国では、素髹〔無文漆器〕などたくさんのずば抜けた漆の技法が創造されました。その頃まで、中国は依然として日本の「師匠」でした。

しかし元代になると、状況に反転が生じました。日本の漆器のレベルが大幅に上昇して、その民族の特色ある独自の漆工芸が現れ、そして中国の漆工芸の基礎を伝承した上で、独特な「蒔絵」工芸が開発されたのです。同時に中国の漆工芸が次第に単一化し、中国の漆職人が初めて日本で「倭漆」の技術を学ぶよう命じられました。続いて日本の蒔絵漆器が成熟すると、「和製」技術が反対に中国の漆器へ影響を及ぼしました。日本の漆工芸の全体水準が中国を上回り、大航海時代が終わるにつれて、日本の漆器がついに欧州で一挙に名を挙げて、それから“japan”が漆器の代名詞になったのです。ここ数年、中日両国の漆器職人らは密接に行き来して、共に両国共有の貴重な文化を保護し伝承することに力を尽くしています。

截金（きりかね）独り留まる

截金は中国古代の職人が創始した貴金属装飾技術です。起源は南北朝の時期で、仏像と絵画の装飾に用いられています。唐代に截金技術はほぼ成熟しており、しかも仏教に従って日本に伝わり、日本の仏教芸術に極めて大きい影響を生じました。のちの考古学研究により、宋以後の仏像の壁画の中で截金の痕跡が次第に消えていき、この精妙で並み外れて優美な芸術がその

発祥地で次第に姿をひそめたことが分かっています。同時に、截金は日本で代々芸術家らの努力のもとで融合し刷新され、次第に強烈な民族の特色を持った芸術作品が発展し、そして截金の技術は今なお広く伝わっており、「究極の金工芸」と称されています。

截金工芸に対して中断なく活きた状態での伝承を維持しているのは、今や世界で日本だけです。これは日本の無形文化遺産に対する保護の重視と関係しています。1970 年代、截金は「重要無形文化」に認定され支援と保護を受けることになり、しかも三名の傑出している截金師が「人間国宝」に認定されたのです。他にも截金師らが絶え間なく截金の紋様、利用に対する革新を行って、截金に無限の可能性と明日を創造しました。

共に築く創意

『京都職人』という本の中で、京都の職人たちが固い信念を持っている姿が見られました。彼らが心血を注いで黙々と守り、自分の手で源流を受け継いでやっと、こうした伝統文化がここまで残っているのです。このような「職人精神」には敬服の念を抱かされます。中国は名実ともに備わる文化大国で、民間にこのような名匠も少なくありません。彼らは同様に一生ただ一つの仕事をして、中国の優れた伝統の文化をいつまでも絶えないように伝承し続けています。

しかし工業の発展、市場の萎縮と後継者難のため、中国でも日本でも伝統の手工芸は衰退する成り行きを避けがたく、絶滅のリスクに直面しているものさえあります。私は中日両国が密接な友好的交流を維持して、伝統文化の伝承と革新あるいは修復と保護の面で、互いに参考にして、勉強しあうべきだと思います。これらの文化芸術は両国の貴重な宝物であるのみならず、全人類の貴重な精神的財産です。中日は手を取って、両国の伝統文化を人類文明の長い流れの中でいつまでも磨滅しない無数

の小石にならせ、それぞれ美しく輝かせるべきです。文化の橋を通じて、中日の経済などの多方面での協力を促進できることを望んでいます。新しい時代の求めに合った中日の友好関係を努力して作り上げましょう。

後注：

読んだ本：

『京都職人』サクラエディトリアルワークス（編著）、劉昊星（訳）

参考文献

[1] 湯大友、劉馨、「中日両国古代漆器文化交流的探討」、中国塗料工業協会、北京

[2] 李文茜、「截金装飾技法及其応用価値研究」、湖北工業大学、2020

李文茜、「截金装飾技法及其応用価値研究」、湖北工業大学、2020

拥抱平凡

李一一
北京大学　北京大学物理学院物理学
笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

我仍记得遇见又吉直树老师《火花》1 的那个晚上。

午夜十二点，昏黑的夜里只有桌上的台灯和面前的电脑还在发出幽幽的光。电脑中正全速运行着科研软件，电脑风扇在寂静中呜呜作响。等待软件运算结果要两个小时，坐在电脑前发呆时，我不禁回想起过去的一周时光：坐在电脑前没日没夜的运行软件进行数值实验，但每次计算的结果都不甚理想。那么，这次计算会和此前的任何一次有何不同吗？如果计算结果还是失败呢？如果此后的计算也都无法完成呢？如果我的科研项目最终宣告失败呢？那我日日夜夜的努力该何去何从？……

在深夜中孤独的等待不知好坏的未来时，迷茫和失落的心魔更容易趁虚而入，但正是这时，《火花》拯救了我。

这不是一个情节复杂的故事，它讲述了两个日本漫才师（搞笑艺人）德永和神谷的追梦旅途。同为不卖座的漫才师的二人在一次商演上偶然相遇，德永被神谷对漫才的全心全意所吸引而拜他为师。在二人相处十年的日常中，他们经历了穷困潦倒、选秀失败、失恋等种种挫折，最终德永选择了放弃漫才，而沦落到破产的神谷则选择了坚持。

在与德永相遇前，我从未想过，世上在追梦路途上挣扎的年轻人大抵都与我们相似：面对无法预知的未来，我们都会被没理由的心虚和恐惧困扰；我们难以堵上一切，但又仰慕像神谷一样义无反顾的勇者；我们不肯向现实屈服，但又不时想迈出那临门一脚；我们恐惧一事无成，但也恐惧自己主动让梦想完结。最重要的是，我们中的大部分都可能终于失败，这才是平凡的结局。

但在与德永相遇前，我亦从未想过，失败的人生同样值得被赋予价值。

在戴上成功者的冠冕前，鲜有人认可平凡人的努力。正如书名火花一样，绚烂的烟花绽放时，鲜有人去赞美那些飘零在空中的暗灰铁屑。但又吉老师选择了去刻画一个失败者，选择了用平淡的笔触去描绘德永内心的迷茫、不安和恐惧，选择了温和的接纳德永的失败。

“花很长时间做一件没必要的事情是很可怕的吧？在人人仅有一次的人生中，挑战一件也许是不出成果的事情是令人胆寒的吧？排除无谓的徒劳，那就是在刻意回避风险。无论是胆小鬼，还是自作多情，甚至是无可救药的傻瓜，只有敢站到遍布风险的舞台上，全心全意为颠覆世俗常规而勇于挑战的人，才能成为真正的漫才师。只要明白这一点，那就足够了。长时间地经历这种无谋划的挑战中，我已经得到了自己的人生。”这是德永放弃漫才时留下的最后一段话。

同为在追梦旅途上奔跑的青年，其中深意触动了我——在一个竞争激烈的行业中奋斗，失败才是平凡，但每一个失败者的经历并不是无意义的。在追梦的旅途中，失败者不仅完成了自身人生的一段重要旅途，更构成了整个行业绚烂烟花的一粒铁屑尘埃。借助德永，又吉老师安抚了每一个年轻追梦人迷茫而惶恐的内心——去看透“失败的才是平凡”的现实，但是认可平凡和失败的意义，才能给予年轻人在恐惧和迷茫中坚持追梦的勇气。

事实上，时代的霓虹总聚焦于成功者，能够拯救平凡大众之

迷茫和苦楚的，大概只有文学了。在当代日本文学中，用温柔的笔触去拥抱最平凡的痛已然成为风潮。

对于出生在不幸的家庭中的孩子，自卑和愧疚是平凡。在《鱼河岸小店》2 中，西加奈子老师就选择了描摹这样的普通孩子，去传达“你以为的失败人生，也许是别人努力活着的结果”的希望号角。

对于在工厂中工作的一般工人，寻找寄托以赋予人生意义是平凡。在《绿萝之舟》3 中，津村记久子就选择了描摹这样的普通女工，去指明在日复一日的人生困境中寻找意义的可能。

对于与社会生活模式不同的“怪人”，不被理解而被另眼相待是平凡。在《人间便利店》4 中，村田沙耶香选择了描述这样的普通店员，去赋予一个个另类人格社会性和自我认同感。

去描述平凡，最绕不过的就是迷茫和痛楚，因此也常有人将其称为“丧文化”。但我以为不然——日本作家们虽着眼于平凡之痛，但并非用犀利的笔触去揭露，而是用温和的语言去陈述；他们并非夸张地刻画普通人的悲惨痛苦，而是真实地描绘平凡中的淡淡哀愁；他们并非批判平凡的生活，而是爱抚凡人的心伤。

古有小林一茶吟俳句：“我知这世界，本如露水般短暂，然而，然而…”用笔锋一刀斩开现实的悲哀，但又温柔的呵护着受伤的人，这是日本文化传承千年的精气，也是日本文学中的“菊与刀”。尽管描述着平凡世界的无奈和残酷，但日本文学家下笔的目的永远是爱护和拯救。正是这样大和民族独有的温柔，让日本文学从“丧文化”中超脱，而指引读者成为“认清生活的真相后仍然爱它”的真正成功者。

读完《火花》的那天晚上，科研软件的计算结果依然不甚理想。我不禁想，或许我也终将成为德永，在追梦旅途中挣扎十年最终放弃，但与其沉浸于迷茫和不安中无法自拔，何不在走到末路前，再坚持看看？

1 又吉直树 . 火花 . 北京 : 人民文学出版社 ,2017. 第 153 届芥川文学奖获奖作品

2 西加奈子 . 鱼河岸小店 . 长沙 : 湖南文艺出版社 ,2018.

3 津村记久子 . 绿萝之舟 . 上海 : 上海文艺出版社 ,2014. 第 140 届芥川文学奖获奖作品

4 村田沙耶香 . 人间便利店 . 长沙 : 湖南文艺出版社 ,2018. 第 155 届芥川文学奖获奖作品

【日本語訳】

平凡を受け入れて

黄靖
武漢大学 信息管理学院

又吉直樹先生の『火花』1に出会った夜のことをまだ覚えています。

真夜中の十二時、薄暗い中で卓上のスタンド照明と目の前のパソコンだけがまだ弱々しい光を出していました。全速力で科学研究ソフトウェアが走っており、静寂の中でパソコンのファンがうなっていました。演算結果が出るまで二時間かかるため、パソコンの前にぼんやり座っていたとき、思わず過去一週間の時間を思い出していました。昼も夜もなくソフトウェアでの数値実験を行っていましたが、毎回あまり理想的でない計算結果でした。それでは、今回の計算はそれまでのどれかとどこか違った？もし計算結果がまた失敗だったら？もしその後の計算も完成できなかったら？もしこの研究プロジェクトが最終的に失敗してしまったら？日夜の努力は一体どうしたら？……

深夜の中で孤独に吉凶の分からない未来を待っているとき、困惑と無力感の悪魔につけこまれやすいものですが、まさにそのとき、『火花』が私を救ったのです。

同作は複雑な物語ではなく、日本の漫才師（お笑い芸人）徳永と神谷の夢を追う旅路を述べた小説です。人気がない漫才師の二人がある商業公演の場でたまたま出会い、漫才に対して誠心誠意な神谷に引きつけられた徳永は彼を師と仰ぎはじめます。二人が付き合った十年の日常の中で、彼らは困窮、オーディションの失敗、失恋などさまざまな挫折を経験し、最終的に

徳永は漫才を放棄することを選び、破産まで落ちぶれた神谷は堅持を選びました。

徳永と出会う前、世の中の夢を追う道であがく若い人がほぼみんな私たちに似ていると思ったことはありませんでした。予知できない未来に直面すると、私たちは理由もなくびくびくし怯えて当惑してしまいます。すべてを賭けるのは難しいですが、また神谷のように後ろに引くことのない勇者を敬慕してしまいます。現実に屈服することは承知しないのに、たびたびゴール寸前のキック踏み出したいとは思います。何事も成功しないことを恐れながら、自発的に夢想を終わらせることも恐れます。最も重要なのは、私たちの大部分は最終的に失敗しますが、それこそ平凡な結末だということです。

しかし徳永と出会うまで、失敗の人生も同様に価値を与えられるに値するのだと思ったこともありませんでした。

成功者の冠を付ける前に、平凡な人の努力を認める人はほとんどいません。書名の火花と同じく、きらきらと美しい花火の開くとき、空中で枯れ落ちる暗灰色の鉄くずを賛美する人もほとんどいません。しかし又吉先生は敗者を浮き彫りにすることを選び、平板な筆触で徳永の内心の困惑、不安、恐れを描写し、温かく徳永の失敗を受け入れることを選んだのです。

「必要がないことを長い時間をかけてやり続けることは怖いだろう？一度しかな い人生において、結果が全く出ないかもしれないことに挑戦するのは怖いだろう。無駄なことを排除するということは、危険を回避するということだ。臆病でも、勘違いでも、救いようのない馬鹿でもいい、リスクだらけの舞台に立ち、常識を覆すことに全力で挑める者だけが漫才師になれるのだ。それがわかっただけでもよかった。この長い月日をかけた無謀な挑戦によって、僕は自分の人生を得たのだと思う。」これは徳永が漫才を諦めたとき残した最後の話です。

自分も夢を追う旅の中で駆け回る青年なので、その中の深い意味が心を打ちました。競争が激化した業界の中で奮闘して、失敗することは平凡ですが、すべての敗者の経歴は決して無意味なものではありません。夢を追う旅の中で、敗者は自身の人生の重要な旅程を完成させたのみならず、業界全体のきらきらと美しい花火の一粒の鉄くずのほこりを構成したのです。徳永の助けを借りて、又吉先生はすべての若い夢追い人の困惑して落ち着かない心をなだめています。「失敗は平凡なこと」である現実を見抜き、しかし平凡と失敗の意味を認めてこそ、若者に恐れと困惑の中で夢を追い続ける勇気を与えられるのです。

事実上、時代のネオンはいつも成功者に照準を合わせており、平凡な大衆の困惑と苦しみを救うことができるのは、恐らく文学だけです。現代日本文学では、やさしい筆触で最も平凡な痛みを受け入れるのが潮流になっています。

不幸な家庭に生まれた子供にとっては、卑屈さと恐縮が平凡です。『漁港の肉子ちゃん』の 2 中で、西加奈子先生はそうした普通の子供を描写して「あなたが失敗したと思う人生は、他の人の努力して生きている結果かもしれない」という希望のシグナルを伝えることを選びました。

工場で働く一般労働者にとっては、託す当てを探し人生の意味を与えることが平凡です。『ポトスライムの舟』3 の中で、津村記久子はそうした普通の女性労働者を描写して、来る日も来る日も続く人生の苦境の中で意味を探す可能性を示すことを選びました。

社会の生活モデルと違う「怪人」にとっては、理解されず特別視されることが平凡です。『コンビニ人間 』4 で，村田沙耶香はそうした普通の店員を描写して、すべての異端者の人格の社会性とアイデンティティを与えることを選びました。

平凡なことを述べるとき、最も避けられないのは困惑と苦痛です。そのため「喪文化」と呼ぶ人が常にいます。しかし私は

そうは思いません。日本の作家らは平凡な痛みに着眼しつつも、決して鋭い筆触で暴こうとするのではなく、温かい言葉で述べています。彼らは決して一般人の悲惨な苦痛を誇張して描写せず、平凡さの中のかすかな哀愁を如実に描写しています。彼らは決して平凡な生活を批判しているのではなくて、凡人の心の傷を愛撫しているのです。

古くは小林一茶に「露の世は露の世ながらさりながら」という句があります。筆鋒の一刀で現実の悲哀を切り出していますが、傷ついた人をやさしく思いやってもいます。これは日本の文化が千年も伝承してきた精神の根源で、日本の文学における「菊と刀」でもあります。平凡な世界の無力と残酷さを述べつつも、日本の文学者が筆を執る目的は永遠に思いやりと救いなのです。まさにこのような大和民族ならではのやさしさで、日本の文学は「喪文化」から抜け出し、読者が「生活の真相をはっきり見きわめてなお愛する」本当の成功者になるように導いています。

『火花』を読み終えた日の夜も、科学研究ソフトウェアの計算結果は依然としてあまり理想的でありませんでした。思わず、もしかすると自分も結果的に徳永になって、夢を追う旅の中で十年あがいて最後に諦めることになるかもしれませんが、困惑と不安の中に浸って抜け出せないよりも、行けるところまで行ってみようかと思いました。

---

1 又吉直樹『火花』、北京、人民文学出版社、2017、第 153 回芥川賞受賞作品

2 西加奈子『漁港の肉子ちゃん』、長沙、湖南文芸出版社、2018

3 津村記久子『ポトスライムの舟』、上海、上海文芸出版社、2014、第 140 回芥川賞受賞作品

4 村田沙耶香『コンビニ人間』、長沙、湖南文芸出版社、2018、第 155 回芥川賞受賞作品

品日本文学书籍，知百般治愈力量

黄靖
武汉大学　信息管理学院
笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

全球蔓延的新冠疫情，不仅极大地冲击着人类世界的秩序，也在人们的心中堆积了无尽的阴郁，在这样的背景下，村上春树推出过一期特别的电台节目——“迎接充满希望的明天的音乐”，这是来自日本的治愈系，在此刻又一次向世界施展着它温柔的魔法。

“治愈系”一词，特指一种能放松心灵，予人温暖与慰藉的力量。尽管全世界都有类似的治愈文化，但日本治愈系的独特之处就在于它的深刻性与影响力，其承载着日本人的生活哲学，带着宗教般的热忱，抚慰着世界。我想，倘若存在这么一期电台节目，让不同年代的日本作家们一同分享书籍中的治愈力量，他们会聊些什么呢？也许，节目会这样开始。

开场音乐是一曲低低浅浅的童谣哼唱，“夜里的飞虫啊 / 向着明亮那方 / 向着明亮那方 / 哪怕只是分寸的宽敞 / 也要向着阳光照射的方向 / 住在都会的孩子们啊”，不消说，这是金子美玲的作品，她的童谣曾长久播放于日本“3.11”大地震灾后的公益广告中，宽慰着广大日本民众饱受创伤的心灵。伴着这美妙的音乐，中勘助的声音响起：“各位，充满童真的书籍可是蕴藏着无尽的治愈力量呢”，于是，他聊起了《银茶匙》，极细腻地分享起书中的童年

碎片，初夏黄昏的晚霞，海风中静静的松原，晴夜里黄色的月亮，蓝红条纹色的糖，兔子的歌，闪烁的佛光，暮春的暖风，绿色的原野，山间的回音，春天的风筝，各类花草鱼虫，以及姑母永远说不完的故事。于是乎，整个电台的氛围变得澄澈自然，纯真明净。

“或者，可以从纯爱作品中寻求治愈”，这是三岛由纪夫的声音，有种很难得的温柔，他聊起了自己的代表作《潮骚》，有一座叫歌岛的小岛，海湾的细浪卷起又退去，在岛上，有备受海神宠爱的青年渔夫新治，美丽的少女初江，以及他们间纯洁的恋爱。这是一个极唯美的牧歌故事，仿佛埋藏着三岛在战后对某种青春且圆满的“清净之所”的向往。听到自己的学生兼挚友的分享，川端康成表示了认同，纯爱作品中的治愈感，也许就是“当我拥有你的时候，无论是在百货公司买一条领带，还是在厨房收拾一尾鱼，我都感动自己是一个幸福的女人。爱像一股暖流滋润着我”。这是来自《伊豆的舞女》中的一段，浪漫且甜蜜的空气渐渐充盈在电台里。

“对于将来的梦想，以及刻骨铭心的恋爱等等，即便描绘不出来，我也朦朦胧胧怀有这样的期待的”，青山七惠接过川端的讲述，“希望的想象，也是良药呢”，接着，她借《村崎太太的巴黎》中村崎太太的口吻说道，“总之，距离咱们这么老远有那么美丽的地方，咱再怎么难过，那些地方也永远是美丽的，今天也一样”。听到这，一直沉默不语的太宰治似乎有被触动，“我也设想过一个美妙的画面”，他顿了顿，“一对善良的夫妇，出人头地，蜜柑，春天，直到结婚，鲤鱼，翌桧”，这画面是极温馨又极美满，鲤鱼代表鱼跃龙门，翌桧比喻明天会更好，短短几句，就道出了人世间最平凡的幸福。可见再颓废消极的人，也是怀着美丽的期许的。大家心里都这么想着。

“不存在十全十美的文章，如同不存在彻头彻尾的绝望”。村上春树总结道，“秘方也许还在与自然相关的作品中”，翻动书页的声音响起，他用温暖的声音分享着《兰格汉斯岛的午后》中的

一段，“连枕在头下的生物课本也发出了春的气息。青蛙的视神经和那神秘的朗格汉岛同样春意盎然。闭起眼睛，传来河水流淌的声音，流得就像在抚摸柔软的沙地”。春天的灵韵太过动人，德富芦花也谈他的《春天七日》：“一朵朵黄色的花朵摇曳多姿。结出红色花苞的瑞香也张开了白色的口子。春兰、水仙都含苞待放。云雀叽叽喳喳叫个不停，麦田里雾霭袅袅升腾而起”。也许是因为这严酷的疫情背景，两位远隔时空的作家分享的都是春日融融的时刻，也许，“聊寄一枝春”就是治愈系最好的注脚。

尽管一切都是想象的场景，但如果真的存在一期以治愈心灵为目，以日本文学探讨为核心的电台节目，会给人们带来多少抚慰啊。品日本文学书籍，便知百般治愈力量，这也让人好奇日本文化中为何潜藏着如此丰富的治愈系元素，我想，原因大概可以从日本人的自然观和社会观中略见一二。从自然观的角度看，由于自然崇拜，日本人多主张在回归自然中疗伤，在亲近自然中汲取安全感，所以治愈系渴慕的多是一种极朴素的生命状态；从社会观的角度来看，治愈系则是身处高速发展社会的日本人对复杂人际关系与社会压力的回应，它以某种简单与幻想性，帮助人们抵御个体与社会的异化。这些都是治愈系的智慧之处，它看清生命的有限和爱的边界，所以，爱而不沉湎其中，并不断刷新着爱的体验，化解着人类的精神危机。

其实，书籍的存在本就是一个治愈人心的避难所，人们可以随时退避其中，但若要对症下药，何不试试翻阅一下这些带有治愈色彩的日本文学书籍？读之品之，它们总让我联想起特鲁多医生的墓志铭，“有时治愈，常常帮助，总是安慰”，在硬邦邦的世界里，把一切都解构，都化约为最纯真的爱、温暖与感动，它们何尝不是医术的一种？含蓄，但充满伟力。

（日）金子美铃著；闫雪译．向着明亮那方 [M]. 长沙：湖南文艺出版社

.2019.
（日）中勘助著 . 银茶匙 [M]. 江苏凤凰文艺出版社 .2017.
（日）三岛由纪夫著；陈德文译 . 潮骚 [M]. 北京：人民文学出版社 .2013.
（日）川端康成著；叶渭渠，唐月梅译 . 伊豆的舞女 [M]. 海口：南海出版公司 .2014.
（日）青山七惠著 . 一个人的好天气 [M]. 上海：上海译文出版社 .2007.
（日）青山七惠著 . 窗灯 [M]. 上海：上海译文出版社 .2009.
（日）太宰治著 . 津轻 [M]. 台北：马可孛罗文化 .2014.
（日）村上春树著；林少华译 . 且听风吟 [M]. 上海：上海译文出版社 .2001.
（日）村上春树著；安西水丸图；张致斌译 . 兰格汉斯岛的午后 [M]. 时报文化出版公司 .2002.
（日）德富芦花著 . 春天七日 [M]. 西安：陕西人民出版社 .2015.

【日本語訳】

日本文学の書籍を味わい、いろいろな癒やしの力を知る

黄靖
武漢大学 信息管理学院

世界中にコロナ禍が広がり、人類の世界の秩序に極めて大きな衝撃となっているのみならず、人々の心の中に限りない憂鬱さが積み上っています。村上春樹がラジオの特別番組「明るいあしたを迎えるための音楽」を流しました。日本発の癒やし系が、このときまた世界にそのやさしい魔法を見せたのです。

「癒やし系」という言葉は、心を楽にして、人に温もりと慰めを与える力を特に指します。世界にも似ている癒やし文化はありますが、日本の癒やし系の独特な点は、その深さと影響力にあります。日本人の生活哲学を載せ、宗教のような熱意を込めて、世界を慰めているのです。もし、さまざまな年代の日本の作家たちがその著書にある癒やしの力を共有するラジオ番組があったら、どんな話をするでしょうか。番組はこう始まるかもしれません。

オープニング曲は軽い童謡の鼻歌、「夜とぶ虫は / 明るい方へ明るい方へ / 一分もひろく / 日のさすとこへ / 都会に住む子らは」、言うに及ばず、これは金子みすゞの作品です。彼女の童謡は長い間日本の「3.11」大震災の後、公益広告の中で放送され、人々の傷ついた心を癒やしました。このすばらしい音楽を伴奏に、中勘助の声。「みなさん、子供心に満ちた書籍には限りがない癒やしの力が埋もれていますよね」と、『銀の匙』を持ち出し、作中の少年時代のかけらをこと細かく紹介します。初夏のたそ

がれの夕焼け、海風の中の静かな松原、晴れた夜の黄色い月、青や赤の筋が入った飴、明滅するみ仏の光、晩春のぬるい風、緑色の平原、山間のこだま、春の凧、さまざまな生き物、そして伯母さんの永遠に言い終わらない物語。そして、ラジオ局全体が清く澄んで自然な、純真で明るくきれいな雰囲気に。

「あるいは、純愛作品の中から癒やしを求められる」と三島由紀夫の声がします。めったにない優しさのある声で、彼は自分の代表作『潮騒』の話をし始めました。歌島という小島で、海湾のさざ波が寄せては返していました。海の神の寵愛を受けた青年の漁師、新治と美しい少女の初江、そしてふたりの清らかな恋愛。きわめて耽美、牧歌的な物語で、戦後の青春さえ完全な「煩わしいものがない所」に対する三島のあこがれが埋もれているかのようです。教え子兼親友の語りを耳にして、川端康成は同意を示し、純愛作品にある癒やしは、「あなたがいるときは、百貨店でネクタイを買っていても、台所で魚をさばいていても、自分は幸せな女だと感動します。愛は暖かい流れのように私を潤してくれます」これは『伊豆の踊子』の一節で、ロマンチックで幸せな空気がだんだんラジオ局の中に満ちてきました。

「将来の夢、というのや、人生をかける恋、など、何も思い描けなくても、そういう望みのようなものだけはうっすらとあるのだった。」青山七恵が川端の話を受けて「希望の想像は良薬ですね」と続け、『ムラサキさんのパリ』ムラサキさんの口ぶりで「とにかく、自分からすっごおく遠く離れたところにそういうきれいな場所があって、つらくなってる自分とは無関係に今日もきれいなんだ、って考える」と言います。これを耳にして、ずっと押し黙っていた太宰治は心を打たれたらしく、「私もすばらしい画面を考えたことがある」と少し言葉をとぎらせて、「善良な夫妻、一頭地を抜き、蜜柑、春から結婚、鯉、扁柏まで」、この画面はきわめて暖かく、幸せ、円満なものです。鯉は登竜門を

代表しており、扁柏（アスナロ）は明日もっと良くなるという比喩で、世間の最も平凡な幸福を述べているのです。明らかに退廃的で消極的な人でも、美しい期待を持っています。みんなの心の中ではそう考えているのです。

「完璧な文章といったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね」。村上春樹は「秘方は多分まだ自然に関する作品の中にある」とまとめました。ページをめくる音を響かせ、彼はやさしい声で『ランゲルハンス島の午後』の一節を読み上げます。「頭の下に敷いた生物の教科書からもやはり春の匂いがした。カエルの視神経や、あの神秘的なランゲルハンス島からも春の匂いがした。目を閉じると、柔らかな砂地を撫でるように流れていく川の水音が聞こえた」。春の霊感はあまりにも人を感動させ、徳冨蘆花も『春七日』を語ります。「山茱萸は黄色の花ざかり。赤い蕾の沈丁花も一つ白い口を切った。春蘭、水仙の蕾が出て来た。雲雀が頻に鳴く。麦畑に陽炎が立つ」。多分この厳しいコロナ禍が背景のため、時空を隔てた作家二人の分かち合った内容がいずれも春の日の和らいだひとときなのでしょう。「聊か寄す一枝の春」〔陸凱の詩〕が癒やし系の最も良い注釈かもしれません。

すべて想像の情景ですが、もし本当に存在する心の癒やしを目的にするならば、日本文学の探求を核としたラジオ番組は、人々に多少なりとも慰めとなるでしょう。品物の日本文学の書籍を味わうと、いろいろな癒やしの力を知ることができ、日本の文化の中にはなぜこれほど豊富な癒やし系の要素が潜んでいるのか興味が湧きます。思うに、その理由はおおよそ日本人の自然観と社会観の中から少し見ることができます。自然観の角度から見ると、自然崇拝のため、日本人の多くは自然に回帰して傷を癒やすと主張しており、自然と親しむ中で安全性をくみ取るため、癒やし系が深く敬慕する多くはきわめて質素な生命の状態なのです。社会観の角度から見ると、癒やし系は急速に

発展した社会に身を置く日本人の複雑な人間関係と社会の圧力への応答で、ある種の簡単な幻想性で、人々が個人と社会の疎外を防ぎ止めるのを助けています。これらはいずれも癒やし系の知恵が見られる点で、生命の有限さと愛の境界がはっきり見えるため、愛してもその中におぼれはせず、絶えず愛の経験を更新して、人類の精神の危機を解消しているのです。

実のところ、書籍の存在は元来、人の心を癒やす避難所で、人々はいつでもその中に逃げることができます。ですがもし対症療法が必要ならば、癒やしの色彩を持つ日本文学を開いてみてはいかがでしょうか。読んで味わうと、いつもトルドー博士の墓誌銘「時に治愈し、よく助け、いつも慰める」を連想します。かちかちな世界の中で、すべてをばらばらにして、すべて最も純真な愛、温もりと感動に変える、医術の一種ではないでしょうか。含蓄があって、しかし巨大な力に満ちています。

金子みすゞ『明るい方へ』、閆雪（訳）、長沙、湖南文芸出版社、2019
中勘助『銀の匙』、江蘇鳳凰文芸出版社、2017
三島由紀夫『潮騒』、北京、人民文学出版社、2013.
川端康成著『伊豆の踊子』、葉渭渠、唐月梅（訳）、海口、南海出版公司、2014.
青山 七恵『ひとり日和』、上海、上海訳文出版社、2007
青山 七恵『窓の灯』、上海、上海訳文出版社、2009
太宰治『津軽』、台北、馬可孛羅文化、2014
村上春樹『風の歌を聴け』、林少華（訳）、上海、上海訳文出版社、2001
村上春樹（文）安西水丸（絵）『ランゲルハンス島の午後』、張致斌（訳）、時報文化出版公司、2002
徳冨蘆花『春七日』、西安、陝西人民出版社、2015

读《人间失格》有感

高辉
安徽外国语学院　国际经济学院
笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

“我们所认识的阿叶，又诚实又乖巧，要是不喝酒的话，不，即使是喝酒……也是一个神一样的好孩子呐。”

《人间失格》这本书读到这里就已经到了尾声，我不知道该如何表达这种情绪，只觉内心如同滚在玻璃残渣上一般让人窒息，好在它结束了。

从翻开这本书的第一页开始，我感觉自己整个人都沉浸在一种压抑、无望的情绪里。

很难想象着世界上居然有人这样痛苦的活着，他生而为人，却对人类畏葸不已，并因这种畏葸而战栗。

阿德勒曾经说过，幸运的人用童年治愈一生，而不幸的人一生都在治愈童年。我想书中的主人公大庭叶藏应该是后者吧！
自幼多病的他成长在一个不愁吃不愁喝的富贵人家，但是他却对“饥肠辘辘”的感觉一无所知。他坐在那幽暗的房间的末席上，因寒冷而战栗。

原本应该是少年花季的岁月里，他却遭受了家中女佣的侵犯。这也使他内心黑暗的种子开始萌芽，逐渐将自己和这个世界隔离开来，仿佛自己是游离于这世间外的旁观者。

他开始为自己的幸福观与世上所有人的幸福观风牛马不相及而感到不安，每夜辗转难眠，乃至精神发狂。最后用“只有活得愚昧或活得无耻的人，才能沉浸在幸福之中”这一套说辞来说服自己。甚至对自我的言行没有了自信，将自己封锁在无尽的黑暗里，将精神上的忧郁和过敏封闭起来，伪装成天真无邪的乐天外表，使自己一步一步地彻底变成了一个滑稽逗笑的畸形人。

慢慢的他开始分析周围每一个人的喜好，把自己伪装成一个乐天的小丑。明白如何取悦父亲，让老师心生愉悦，甚至得到学校里众人的拥戴。

他给自己蒙上了一层保护衣，就像是一个胆小鬼将自己的真实面目藏起来。他以为自己逗笑人的本领已经掌握的天衣无缝了，可是还是被竹一看出了破绽。

一句“故意的”让他的生活被恐惧与不安包围，就像是自己的完美面具被人生生撕裂，露出他自己都不敢直视的、内心最真实的丑态。

他迫切的想要拉拢竹一，与他成为朋友。但是表面的和善和内心的煎熬，懦弱胆小的他又怎么能体会到友情的温暖呢？

他再次用“这世间，所谓朋友真正的面目，就是在相互轻蔑而又互相往来并自我作践”的感慨来继续说服自己。

后来他因为逃学被家里放弃，开始如同不系之舟般的自我放逐。在画廊私塾认识的堀木教会他烟酒，娼妓，也因此他遇到有夫之妇的常子，两个历经风霜的苦命人，如同泊海的船找到了归宿。相互慰藉后，打算一同奔赴黄泉，但是命运与他开了个玩笑，常子死了，他活下来了。

苟活下来的来并没有多快乐，浑浑噩噩的度过了一段时光后，他遇到了善良的静子母女。原本以为是幸福的开端，却不知可悲的是“胆小鬼连幸福都害怕，碰到棉花也会受伤。”

“爸爸可不是因为喜欢喝酒才喝的。只是因为他人太好了……”

静子的女儿繁子的话就像是一把锐利的匕首硬生生的刺痛他那沉寂已久的心。想他不久前还偷拿了静子和服上的腰带和衬衫去当铺上典当，然后用换来的钱去银座喝酒。

相形见绌的他觉得自己就像是一个混蛋，给她们母女俩的生活搅和的一团糟。长久的羞愧感让他最终逃离了静子的家。

可怜的他卑微到谷底，幸福对他来说是那么遥不可及。他开始自暴自弃。一直用烟酒麻痹自己，好似这样他就离悲伤远了一点。

良子的出现让他暂时忘记了过去的那些“耻辱和罪恶”，让他得到了新的救赎，他开始慢慢的摆脱了颓废开始了新的生活。

可是好景不长，良子被商人强暴了。比起良子身体的玷污，他更在乎的是良子对他人的信赖遭到了玷污。那种纯真无暇的信赖之心恰如绿叶遮掩的瀑布一样赏心悦目，可是他一夜之间蜕变成了发黄的污水。

纯洁无暇的信赖之心有什么错呢？他一遍遍质问自己。良子仿佛就是曾经的自己，他所有的希望就在那一瞬间被瓦解。就像是病入膏肓的病人在不断的挣扎之后放弃了生的希望，他放弃了这个世界。

这世道的混乱，人情的薄凉，现实的惨淡……这一切的一切让他恐惧、让他不安。他像是一只搁浅的鱼，所有的水分被抽干后，他失去了生而为人的资格。

怀着压抑的心境看完这本书，感触颇深。我懂叶藏的感受，就像小时候感冒被逼着吞下药，结果药卡在喉咙里不上不下，只能等它一点一点的在口腔中融化，最后被苦楚蔓延整个味蕾。
我和叶藏有很多的共鸣之处，但是我清楚的知道我不是叶藏。我心疼他的遭遇，但是不认同他的选择。

如果我是叶藏我会好好活下去，就像竹一说的那样“你以后会是一个著名的画家”。为什么质疑自己呢？即使所爱隔山海，也终有一天会抵达。

这世间根本就没有真正乐观的人，大家都掩藏了自己消极的情绪好好生活。放眼过去，车水马龙哪一个不是为了生活而生活。每个人都为了材米油盐奔波着，他们也会有片刻迷茫、哀伤，但是他们会为了所热爱的、向往的勇敢前进。

或许你是不幸的，但是你可曾想过还有人比你更不幸。他们苟延残喘，拼命的活着。你有什么理由自暴自弃？顾影自怜？
明天的太阳依旧会高高升起，我们有这么好的生活条件，没理由自暴自弃。

风雨欲催我，我偏逆山行。生而为人，请怀着感激的心境好好活着，热爱这个世界。

陌生人，祝你面朝大海辽阔，春暖花开芬芳。

【日本語訳】

『人間失格』を読んで

高輝
安徽外国語学院 国際経済学院

「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んでも、……神様みたいないい子でした」

『人間失格』をここまで読むとすでに終わりです。私はこのような情緒をどう表現するべきか分かりません。ただ内心がガラスの残滓の上を転がるような窒息を感じましたが、幸いにそれは終わりました。

この本の最初のページをめくったときから、私は自分の全体が重苦しい、望みがない情緒の中に浸ると感じました。

世界にこのように苦しんで生きている人がいるとは想像しにくいのです。人として生まれながら人間に対して恐れがやまず、そうした恐れるため震え上がっているだなんて。

アドラーは、幸運な人は少年時代で一生を治愈し、不幸な人は一生すべてで少年時代を治愈していると述べています。主人公の大庭葉蔵は後者のはずだと思います。

幼少から病気がちの彼は衣食住に困らない家に育ちましたが、「空腹」という感覚がさっぱりわからなかったとあります。彼はほの暗い部屋の末席に座り、寒さに震えていました。

本来なら少年の花盛りであるべき歳月の中で、彼は家の女中に犯されていました。このことも彼の内心の闇の種が芽生えるのを促し、彼は次第に自分とこの世界と隔離して、まるで自分

がこの世の中から遊離したように傍観者になっていくのです。彼は自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがっているような不安を感じ、その不安のために夜々、転輾し、発狂しかけてしまいます。最終的には「愚かで無知に生きているか恥を知らず生きている人だけが、幸福に浸ることができる」という口実で自分を説得しました。

自分の言行に対してさえ自信がなくなって、自分を果てない暗黒の中に封鎖し、精神上の憂鬱とアレルギーを密封して、天真爛漫で楽天的なうわべに偽装し、自分を一歩ずつ徹底的に、滑稽な笑わせるアンバランスな人に変えてしまいました。

彼はゆっくりと周囲のすべての人の好みを分析し、自分を楽天的な道化に偽装しました。どのように父の歓心を買って、先生を喜ばせるか分かり、学校中での人気さえ得ました。

彼は自分に防護服をかぶせ、臆病者が自分の真の顔を隠すかのようでした。彼は笑わせる芸当をすでにマスターし自然で非の打ち所がないと思っていましたが、やはり竹一に見抜かれ破綻してしまいます。

「ワザ」の一言で彼の生活は恐れと不安に包囲され、自分の完璧なマスクが人にむざむざ引き裂かれたように、自分も直視できない内心の最も真実な醜態を現してしまいました。

彼は切実に竹一を丸め込もうと思い、友達になります。しかし温和で善良な表面と内心の苦しみで、気が弱く臆病な彼が友情の温かみを感じることができるはずはありません。

彼は再び「互いに軽蔑しながら附き合い、そうして互いに自らをくだらなくして行く、それがこの世の所謂「交友」というもの」という感慨で自分を引き続き説得しました。

のちに彼は学校をサボって家を勘当され、つながれない舟のような自らの放逐が始まります。画廊の私塾で知り合った堀木に酒と煙草と淫売婦を教えられ、また人妻ツネ子と出会って、

辛酸をしばしば経験した哀れな運命の二人が、停泊する船のように落ち着き先を見つけました。互いに慰めた後、いっしょに黄泉に向かおうとしましたが、運命のいたずらで、ツネ子は死に、彼は生き残ってしまいます。

かりそめな生き方をしていても楽しみはあまりなく、しばらく間抜けな時間を過ごして、彼は善良なシヅ子とその娘に出会いました。もとは幸せな始まりだと思って、いましたが、悲しいことに「弱虫は、幸福をさえおそれるものです。綿で怪我するんです」。

「お父ちゃんはね、お酒を好きで飲んでいるのでは、ないんですよ。あんまりいいひとだから、だから、……」

シヅ子の娘シゲ子の話は、鋭いあいくちのように、彼の静まりかえってすでに長い心を刺すのでした。少し前にシヅ子の帯や襦袢をこっそり持ち出して質屋に行き、お金を作って銀座で飲んだことを思い出します。

比べてみると見劣りがする彼は、自分という馬鹿者が、この母娘二人を滅茶苦茶にするのだと思いました。長いこと恥じ入った彼は最後にシヅ子の家を逃げ出します。

哀れな彼はどん底まで卑しくなり、幸福は彼にとって遥か届かないものでした。彼は自暴自棄になり始めます。酒と煙草に浸ると、悲しみから少し遠ざかれるようでした。

ヨシ子の出現で彼は過去の「恥辱と罪悪」をしばらく忘れ、新たな救いを得た彼は、ゆっくりと退廃的な生活を抜け出し新しい生活を始めます。

しかしよいことは長続きしないもので、ヨシ子は商人に強姦されてしまいました。ヨシ子の身体が汚されたことよりも、ヨシ子の信頼が汚されたことのほうが彼は気に懸かりました。青葉の滝のようにすがすがしく思われていた無垢の信頼心が、一夜で黄色い汚水に変ってしまったのです。

無垢の信頼心の何が間違ったのか、彼は何度も自分を問いただします。ヨシ子がかつての自分のようで、彼のすべての望みはその瞬間に崩れてしまいました。回復の見込みがない病人が絶え間なくあがいた後で生きる望みを放棄したかのように、彼はこの世界を放棄しました。

時世の混乱、人情の冷たさ、現実のうす暗さ……その何もかもすべて彼は恐れ、不安になりました。彼は打ち上げられた魚のように、すべての水分が干され、彼は生きて真人間になる資格を失いました。

重苦しい気持ちを持ってこの本を読み終え、ひときわ感慨深いものがあります。私は葉蔵の感じたことが分かります。小さい時に風邪で薬を飲むよう強いられた結果のようです。薬が喉に詰まって、口腔の中で少しずつ溶けるのを待つしかなくなり、最後には苦みが味蕾に広がりました。

葉蔵とは多くの共鳴するところがありますが、私が葉蔵ではないことははっきりと分かっています。私は彼の境遇を惜しみますが、彼の選択は認めません。

もし私が葉蔵だったなら、しっかりと生きていき竹一が言ったように「偉い絵画きになる」でしょう。どうして自分に質疑するのでしょうか。たとえ愛するものが山海を隔てていても、いつかはたどり着きます。

この世の中、そもそも本当に楽観的な人はいません。みんなが自分の消極的な情緒を隠してしっかりと生活しているのです。過去に目を向けると、誰も生活のために生活しているのではありません。誰もが衣食住のために奔走しており、彼らにも片時の困惑や悲しみはありますが、彼らは愛するもの、あこがれのために勇敢に前進しているのです。

不幸な人は、自分よりも不幸な人がいると考えるかもしれません。彼らは幾ばくもない余命をつないで、一生懸命に生きて

います。自暴自棄になる理由などあるでしょうか。自己陶酔でしょうか。

明日の太陽は相変わらず高く昇るでしょう。これほど良い生活条件で、自暴自棄になる理由はありません。

苦難が私をせきたてようとしても、私は逆らって進みます。人として生き、感謝の気持ちを持ってしっかりと生き、この世界を心から愛してください。

見知らぬあなたの向かう海が果てしなく広く、春うららかに花開くことを祈って。

编辑委员会
主任
陈文戈　高桥正征　李新碗

编委
王汉平　陈进　顾文君　孙立成
宫内孝子　阿罗美奈子　汤莹莹　刘珊

主编
中国外文局亚太传播中心（人民中国杂志社）
日本科学协会
上海交通大学

统筹
孙立成

美编设计
孙立成　孙研

鸣谢
特别赞助：日本财团

赞助：全日空航空公司
中国教育图书进出口有限公司
上海外语教育出版社

后援：日本国驻华大使馆
中国日本友好协会
中央广播电视总局CRI日语部
全国日语教学研究会
人民网
中国网
国际赠书中心

协力：上海初盟教育科技有限公司
中日之窗
蔚蓝第六时限日语教育网
北京和風薫文化伝媒有限公司